

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No.41

特集 多摩の近代化—『令和』へのあゆみ—



立川市指定有形文化財 馬場吉蔵画「立川村十二景 明治三十七年時代 山中陸橋」
(個人蔵、立川市歴史民俗資料館保管)

2020.3

東京都三多摩公立博物館協議会

目次

【特集】多摩の近代化—『令和』へのあゆみ—	2
●一公団からURへ—令和を迎えた多摩の団地とまちづくり	
UR都市機構 集合住宅歴史館 増重 雄治	2
●企画展「麻布区役所と日獣大～110年間の歩み～」	
日本獣医生命科学大学附属ワイルドライフ・	
ミュージアム 羽山 伸一	4
●刀鍛冶の足跡に見る近代化 ～特別展「刀鍛冶と文明開化～明治	
期・多摩の乞田鍛冶の渡米に見る海外技術導入～」を通して～	
パルテノン多摩歴史ミュージアム 橋場 万里子	6
●令和元年度2つの企画展	
立川市歴史民俗資料館 高橋 学	10
●特別展「豊田のむかし」	
日野市郷土資料館 矢口 祥有里	11
●企画展「カメラが写した国立一本田家資料と市役所広報移管写真	
を中心に—」	
くにたち郷土文化館 安齋 順子	14
会員館活動報告（順不同）	16
東村山ふるさと歴史館・調布市郷土博物館・町田市立博物館・府中市郷	
土の森博物館・奥多摩水と緑のふれあい館・福生市教育委員会（福生市	
郷土資料室）・武蔵村山市立歴史民俗資料館・日野市郷土資料館・五日	
市郷土館・羽村市郷土博物館・清瀬市郷土博物館・小金井市文化財セン	
ター・立川市歴史民俗資料館・檜原村郷土資料館・くにたち郷土文化館・	
江戸東京たてももの園・狛江市立古民家園（むいから民家園）・日本獣医	
生命科学大学附属ワイルドライフ・ミュージアム・東京都立埋蔵文化財	
調査センター・国立ハンセン病資料館・八王子市郷土資料館・多摩六都	
科学館・武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館・コニカミノルタサイエン	
スドーム（八王子市こども科学館）・首都大学東京91年館・たましん歴史・	
美術館・町田市民文学館ことばらんど・国際基督教大学博物館湯浅八郎	
記念館・パルテノン多摩歴史ミュージアム・東京農工大学科学博物館・	
UR都市機構 集合住宅歴史館・東大和市立郷土博物館・瑞穂町郷土資	
料館けやき館・帝京大学総合博物館・青梅市郷土博物館	

東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿

—公団からURへ— 令和を迎えた多摩の団地とまちづくり

UR都市機構 集合住宅歴史館 増重 雄治

はじめに

独立行政法人都市再生機構（UR都市機構、以下UR）は、昭和30(1955)年に日本住宅公団（以下、公団）として発足後、途中3回の組織改編を経て現在に至り<図1>、これまでに分譲住宅等を含め約156万戸の住宅建設と各地のニュータウン開発（事業実施地区281地区・面積約41,500ha）等を実施し、分譲住宅事業やニュータウン開発事業からは撤退しましたが、現在は約72万戸（平成30年度末時点）のUR賃貸住宅の管理・経営、都市の魅力と国際競争力を高める都市再生の推進、防災性を高めるまちづくりの推進及び震災復興事業の実施等を行っています。



図1 UR都市機構の沿革

第二次世界大戦後の日本の住宅政策は、①持ち家希望層を対象とした住宅金融公庫（現住宅金融支援機構）融資、②低所得者を対象とした公営住宅、③中堅勤労者世帯を対象とした公社・公団住宅の大きく3つの柱から成り立っていました。③の公団は特に高度経済成長期の大都市圏の住宅不足への対応と、震災・戦災の経験から住宅の不燃化推進が期待されていました。

昭和の公団住宅：「団地族」から「高・遠・狭」へ

風呂なし共同トイレ6畳間の木質アパートで暮らす一家も珍しくなかった昭和30年代初頭に、公団住宅は内風呂・水洗トイレ・シリンダー鍵付きのうえ、「食寝分離」を実現：食事を摂る場所と寝る場所を完全に分離するために台所・食事室をDK（ダイニングキッチン）と名付け、限られた面積の中でDKのある間取りを用意するなど<図2>、当時としては斬新で画期的なライフスタイルを提供し、高倍率の抽選に当たり公団住宅に住む人々は羨望的となり「団地族」と呼ばれるようになりました。

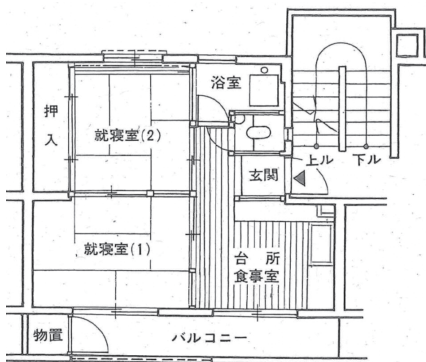


図2 公団住宅初期の2DK（集合住宅歴史館再現間取り）

首都圏の公団初の団地（賃貸）は、昭和31(1966)年に入居を開始した牟礼団地（三鷹市）ですが、発足当初に年間2万戸を目標とした公団の住宅建設戸数は、高度経済成長に伴う住宅需要増大により都市部の住宅用地が払底して更に郊外の開発へ移行し、ピークの昭和46(1971)年の年間8万戸まで急速に増加し、多摩地域でも大規模な宅地・団地開発が行われました<表>。

団地名	戸数	完成年月	所在地
町田山崎	3,920	S43.8	町田市
多摩ニュータウン永山	3,209	S46.3	多摩市
館ヶ丘	2,396	S50.3	八王子市
藤の台	2,227	S45.7	町田市
神代	2,092	S40.7	調布市・狛江市
国立富士見台	2,050	S40.11	国立市
百草	2,028	S44.11	日野市・多摩市
清瀬旭が丘	1,818	S42.9	清瀬市
小平	1,766	S40.3	小平市
鶴川	1,682	S42.12	町田市
多摩平の森 ※	1,528	H14.3~	日野市
ひばりが丘 パークヒルズ ※	1,504	H16.3~	西東京市・東久留米市
立川若葉町	1,463	S46.7	立川市
けやき台	1,250	S41.10	立川市
サンヴァリエ桜堤 ※	1,120	H11.10~	武蔵野市

令和元年12月現在、※印は建て替え済み団地

表 多摩地域のUR賃貸住宅団地戸数ベスト15

北多摩地区の団地が概ね武蔵野台地上に立地し平坦なのに対し、南多摩地区では団地の多くが多摩丘陵に立地することから団地内も起伏に富んでいるのが特徴となっています。

やがて、昭和48(1973)年には日本全国で住宅戸数が世帯数を上回り住宅の物量が充足され、昭和50年代半ばからは郊外の入居不振の公団住宅は「高・遠・狭」：家賃が高い・都心から遠い・面積が狭いという批判も寄せられるようになり、その対策として成熟社会の住環境ニーズに対応した間取りの多様化や住棟外観の魅力付け等が行われるようになりますが、昭和末期にはバブル景気により一時的に住宅需要が高まり不動産価格が高騰、多摩地域でも中層住棟（5階建て以下）はあまり建てられなくなり、エレベーター付きの高層住棟（6階建て以上）中心の高密な計画へと変わりました。

トピック：多摩ニュータウン

東京郊外のスプロール化の防止と良質な住宅・宅地の供給を目的として、稲城・多摩・八王子・町田の4市の丘陵地帯にまたがる面積約2,884ha、計画人口約34万人の多摩ニュータウン事業は昭和40(1965)年にスタートしました。事業手法は「新住宅市街地開発事業」（略称：「新住」、施行者：都、都住宅供給公社、公団）と既存集落エリアを中心とした8地区の「土地区画整理事業」（施行者：都、公団、組合）による面整備及びこれに付随する周辺幹線道路や河川、流域下水道等の関連公共施設整備事業により基盤整備を行いました。

住宅は、都営・公社・公団の公的施策住宅及び民間事業者により供給されています。昭和46(1971)年に諏訪・永山地区で初めて入居が開始しましたが<写真1>、依然として続く首都



写真1 多摩ニュータウン諏訪・永山団地(竣工当時)

圏の住宅不足に対応するため当初は2DK・3DKといった標準的な間取りの中層住宅を中心として大量供給を行いました。

その後、昭和50年代には、専用庭やコモンスペースを持つ「タウンハウス」等の戸建て感覚の集合住宅も作られ、また昭和60年代以降は総合的な都市景観の形成にも力を入れるようになりましたが、バブル崩壊後の構造改革の流れのなかで、住宅供給は民間へ委ねる方向へと施策が転換されました。

また、ニュータウンの入居が進むにつれ、税収や雇用の確保の観点から業務施設の導入が求められるようになり、新住宅市街地開発法の昭和61(1986)年の改正以降は業務オフィス等の導入が可能となると、その後立地したニュータウンの多様な高等教育機関、商業施設及びアミューズメント施設等への来街者と共に様々な人々が行き交う街へと変わりました。

平成の30年間：住宅から都市へ

平成に入って暫くは堅調だった住宅需要も、バブル崩壊後の「失われた20年」の間に深刻なデフレを迎えますが、住宅・都市整備公団も「住宅」の看板を下ろし、新たに「都市」の再生も目指す組織として「都市基盤整備公団」、そして特殊法人改革の一環としてURに変わることとなりました。

公団住宅改めUR賃貸住宅では、老朽化した団地・住棟の建替えを除く新規賃貸住宅の建設を取り止めましたが、平成30(2018)年12月には「ストック活用・再生ビジョン」を公表し、今後15年の団地のあり方を見据え、居住の安定に配慮しつつ、例えば高経年団地はストック再生(建替・集約等)、中程度以下の経年団地はストック活用(既存建物の利活用)を行う等、地域及び団地毎の特性に応じた団地の活用を検討していくこととしました。また、既存団地の価値向上の取り組みの一つとして、住戸のリニューアル・リノベーション<写真2>



写真2 MUJI × UR 団地リノベーションプロジェクト(例)

も実施しています。

また、URの都市再生部門では、従来の市街地再開発事業だけでなく、市街地整備・関連公共施設整備のノウハウや震災復興で得た経験を活用した、密集市街地の防災性向上や三鷹中央防災公園等の防災公園の整備等を手掛けるようになりました。

トピック：ファーレ立川

立川駅の北口、高島屋から北のオフィス街には「ファーレ立川」という名前がついていますが、ご存じでしたか？立川基地跡地関連地区第一種市街地再開発事業により住宅・都市整備公団(当時)が整備を行い平成6(1994)年に街開きを行った約5.9haの地区で、平成10(1998)年開通の多摩都市モノレールと共に当地の業務核都市としての発展に寄与しています<写真3>。



写真3 ファーレ立川外観(南側より・竣工当時)

街の外観の特徴としては、航空法適用による建物の高さ制限があり、外壁の色彩調和も考慮された他、快適な都市景観の創出のため「アート計画」を重要な要素として(アートディレクター：北川フラムさん)、世界36か国・92人の作家による109の作品が歩行者空間を中心に設置されています。

今では各地の商業施設やマンション等でアートが当たり前のようになっているものの、当時は機能性0%のアートの配置はハードルが高かったため、「機能(ファンクション)を美術(フィクション)に」のコンセプトのもと、換気塔・車止め・街灯・ベンチ等の街に必要な機能をアートに持たせて設置したという背景があり、25年にわたり長く市民に見守られてパブリックアートによる地域づくりの見本となっています。

おわりに：令和を迎えて

さて、平成から令和になっても昭和レトロブームは続き、団地愛好家も増えているように感じます。団地が趣味の対象となるとはかつては想像もできませんでしたが、見た目のインパクトと豊かな屋外空間を有する多摩の団地を地域固有の資産として捉え直す視点に改めて気づかされた次第です。

先述の多摩ニュータウンを含め、地域が超高齢化社会を迎える中で、多様化するニーズに対応した賃貸住宅の供給のみならず、持続可能で活力ある地域づくりを併せて行う必要があります。URは各地域の関係者や地方公共団体及び医療・福祉事業者等と連携して、団地を含む地域一体で「ミクストコミュニティ」：多様な世代が生き生きと暮らし続けられる街・住まいの実現と新しい故郷の創生を目指しているところです。

企画展「麻布区役所と日獣大～110年間の歩み～」

日本獣医生命科学大学附属ワイルドライフ・ミュージアム 館長 羽山 伸一

はじめに

日本獣医生命科学大学一号棟（以下、本館）の歴史は、明治42年（1909年）まで遡ることができます。本館は、この年の6月、東京市麻布区役所庁舎として竣工しました。この庁舎は、関東大震災を乗り越えた後、本学の前身である日本獣医学校が買い取り、昭和12年（1937年）に本学が武蔵野市境南町へ移転した際に校舎として移築され、現在は博物館などに活用しています。また、武蔵野市民にとっても親しみが持てる建物として、平成12年度（2000年度）に市の「第一回たても武蔵野大賞」をいただいております。

本館は、令和元年（2019年）11月に文化審議会文化財分科会の審議・議決を経て、国の登録有形文化財（建造物）に登録するよう文部科学大臣に答申され、今後官報による告示を経て登録有形文化財（建造物）となる見込みです。

そこで、令和元年度（2019年度）の当博物館企画展では、文化財登録の調査が実施された際に、本館の屋根裏から発見された新たな資料である「棟札」を中心に、本館の歴史を紹介しています。本稿では、この企画展の展示内容をご紹介します。

旧東京市麻布区役所時代

この庁舎は、東京府の15区政時代（明治11年（1878年）施行、明治22年（1889年）に東京市となるも明治31年（1898年）にようやく自治市制が布かれた）の、明治42年（1909年）に麻布区麻布市兵衛町に建てられたものです。竣工時の図面は残っていませんが、木造2階建の庁舎には、1階に事務室が、2階に議場と職員控室が設置されていたようです。関東大震災で焼け残ったのですが、昭和8年（1933年）に東鳥居坂で鉄筋コンクリート造の新庁舎が竣工したため、旧庁舎は不要となりました。



写真 旧東京市麻布区役所の外観（出典：東京市麻布区（1941年）「麻布区史」）

創建時は、尾崎行雄（衆議院議員当選25回、在任明治23～昭和28年（1890～1953年）、憲政の神様と呼ばれる。東京市長第2、3代在任明治36～明治45年（1903～1912年））が東京市長第2期目の在任中でした。本館の屋根裏から発見された棟札には、建築関係者として下記の名前が読み取れます。

東京市長 尾崎行雄、営繕課長 小原益知、主任技手 須貝卯太郎、現場技手 小林鶴吉、請負人 竹田源次郎

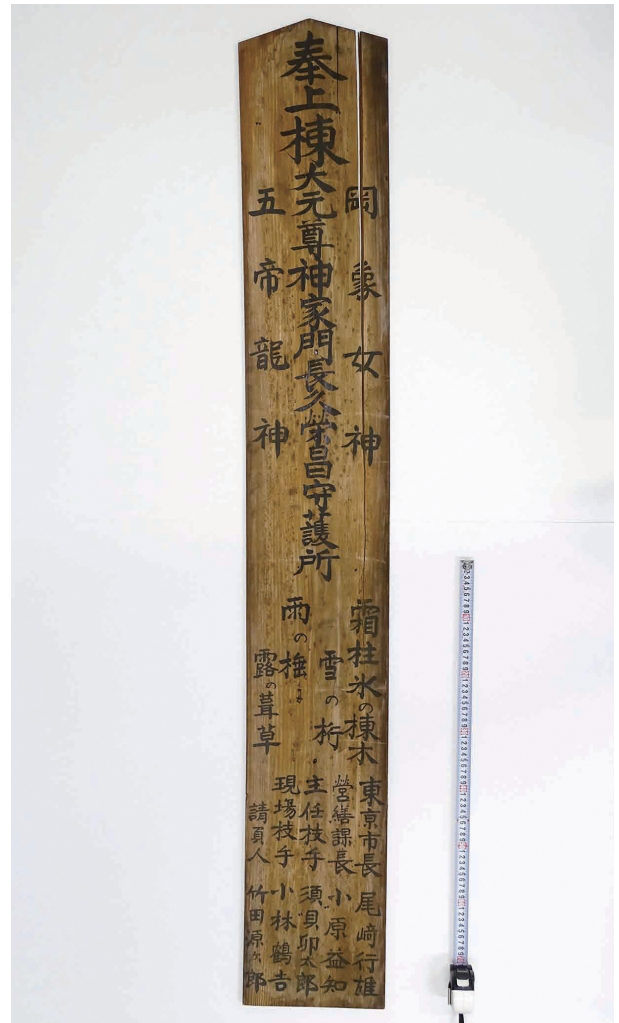


写真 竣工時の棟札

東京市の営繕課長小原益知のもとで設計をしたのは主任須貝卯太郎と担当小林鶴吉で、設計は専ら小林が担当したとみられます。彼は浅草区役所（明治40年（1907年））や下谷区役所（明治41年（1908年））、高崎市庁舎（明治43年（1910年））などを設計しています。

日本獣医学校本館時代

当時、下目黒にあった日本獣医学校は、大正15年（1926年）の獣医師法公布をきっかけに、学校施設設備の充実拡大計画が進められるようになり、現在の校地である武蔵野市武蔵境への移転が決断されました。この時、使われなくなっていた麻布区役所庁舎を買い取り、移築したものが現在の本館です。

日本獣医学校は新しい理事長秋本敏男（のちに武蔵野町長）のもとで昭和11年（1936年）から校舎、家畜病院その他の新築を行い、翌12年（1937年）4月には新校舎での授業を開始し、同年12月に旧麻布区役所を移転して本館とする上棟式が行われました。創建時の棟札と一緒に発見された移築時の棟札には、日本獣医学校新築本館として昭和十二年十二月三日上棟祭執行と記述があります。



写真 現在の本館

現状の保存状況

今のところ、移築当時の図面は見つかりませんが、区役所庁舎時代の写真と移築後の写真を比べると、玄関ポーチの形を半円形から四角に変更し、また窓の回りの装飾を撤去するなどの改修を行っていたことがわかります。また、平成24年(2012年)には、現在の建築基準法に適合するため、本館入り口の車寄せとバルコニー部分の縮小化工事が行われ、二階のマンサード屋根に喰い込んでいた三角形の切妻壁(ペジメント)をマンサード屋根軒下に入れて低く下げています。そのため正面の外観はやや変わってしまいましたが、創建時の雰囲気はまだ留められています。

なお、平成30年(2018年)に実施された調査の結果、一号棟を特徴づける屋根の上の塔は移築時に付けられたものであることが判明しました。

おわりに

本館は、都内に現存する唯一の明治期の役所建築として貴重であり、また武蔵野市の歴史的景観として地域のランドマーク



写真 本館全景



写真 本館北東側階段

になっています。本学では、これを後世に残し、また都民をはじめとして多くの方々に活用していただけるよう、本館を保存することにいたしました。

このたび、本館は国の登録有形文化財となりますので、耐震化工事を行うとともに、現在は予約制となっている博物館を含め、なるべく早い段階で一般公開ができるようにしたいと準備を進めております。また、上述したように、創建当時から内外装ともに意匠が変更されてきましたが、可能な範囲で復元することを検討しております。

これらの事業に関わる技術指導や資金調達も必要となりますので、多くの方々からのご支援を賜りますようお願いいたします。

刀鍛冶の足跡に見る近代化 ～特別展「刀鍛冶と文明開化 ～明治期・多摩の乞田鍛冶の渡米に見る海外技術導入～」を通して～

パルテノン多摩歴史ミュージアム 橋場 万里子



会場風景



伝・濱田正行像 浜田秀隆氏所蔵

1. はじめに

貝取村（現・多摩市）出身の兄弟鍛冶・吉之、正行（写真）は、幕末・明治にかけて多摩と江戸にて刀鍛冶として活躍し、「乞田鍛冶」と呼ばれた。兄「吉之」は本名を「濱田文蔵」といい、明治以降は本名の「文蔵」を名乗る。弟「正行」は本名を「濱田長吉」といい、明治以降は刀工名の「正行」を名乗った。

明治以降は兄弟ともに農具を手掛け、第一回内国勸業博覧会に出品している。文蔵は原町田に出店し、有名な野鍛冶「ひょうたん鍛冶」の草分けとなった。正行は欧米模造農具の製作を手掛けたのちに渡米し、帰国後に日本人・欧米人の合同自転車遠乗り会の世話人となり、神田で自転車の輸入販売店を開く。自転車店は徳川昭武にも利用され、三男も昭武の遠乗りに随行した。長男はアメリカで建築を学び、帰国後は鉄骨建築技術を期待されて海軍に入り、後に国指定登録有形文化財となる大子銀行本店（茨城県大子町）を設計した。

文蔵に関しては、ご子孫の調査により「ひょうたん鍛冶」に至る過程が判明したため2009年に「鍛冶屋のあゆんだ幕末明治」という展示を開催した。一方、正行に関しては長らく不明であったが、正行のご子孫の先祖調査と当館への問い合わせによりその動向が判明し、その内容が極めて興味深いものだったため、2019年4月から7月にかけて「刀鍛冶と文明開化～明治期・多摩の乞田鍛冶の渡米に見る海外技術導入～」を開催することになった。折しも東京2020オリンピックで多摩市内が自転車ロードレースのルートになることが決まっていたため、第一会場で自転車にゆかりのある乞田鍛冶の足跡を展示し、第二会場でオリンピックの自転車ロードレースを紹介することとした。

兄弟鍛冶のたどった足跡は、地域に根付き野鍛冶となった兄に対して、海外の新技术に目を向けた弟という対照的なものであり、近代化する日本において幕末の刀鍛冶がそれぞれのやり方で技術を生かしながら生き抜いた事例として興味深い。本稿は、「多摩の近代化」の一事例としてこの乞田鍛冶の足跡および展示のようすを報告するものである。

2. 乞田鍛冶兄弟の足跡

(1) 乞田鍛冶の出自

①父・助左衛門

乞田鍛冶兄弟は、貝取村の濱田家に生まれた。父の助左衛門（一重・麥花）も鍛冶でかつ歌に優れた文化人でもあり、明治14年（1881）に麥花塚（多摩市指定有形民俗文化財）を建立した。麥花塚には兄弟の刀工名「吉之」「正行」が刻まれ、多摩市内の現地に残る唯一の乞田鍛冶の足跡となっている。

②兄・文蔵吉之

兄の文蔵吉之は元治2年（1865）に苗字帯刀を許され、慶応3年（1867）に聖護院門跡から法橋・法眼位を取得した。子孫宅に残された古文書からは、父・助左衛門が木曾（町田市）の三井修驗・覚圓坊を通じ、大小の刀や法具などを聖護院門跡に献上したことが判明している。

吉之は下原鍛冶の系譜を引く引田鍛冶・宮川吉國に学び、8点ほどの作刀例が残る。うち1点は伏見宮家に伝わる短刀とされる。子孫宅には「元治元甲子冬日 調布玉川住吉之作」銘の刀が伝来し、新選組の支援者であった日野の名主・佐藤彦五郎家には「吉之」銘の槍が現存する。小野路村の「小島日記」、連光寺村の「富沢家日記」にも元治元年（1864）頃から乞田鍛冶に関する記載が見られ、村々の農兵の武装が進められた慶応2年（1866）に特に取引が活発化していた。「小島日記」に記載がある鉢がねや木刀の鉄鏝・相釘などは、現物が小島資料館に残り、これらが乞田鍛冶の製品である可能性もある。

③弟・長吉正行

一方、弟の長吉正行は兄とは異なる師・酒井濤江介正近に師事している。正近は安政2年（1855）に武州御嶽神社に太刀を奉納した人物の一人として知られる。

正行の作刀例は江戸期と明治期に1点ずつ、計2例が残るのみで、江戸期の刀には「於江府源正行作之」銘が切られる。濱田本家には「（長吉は）江戸に行った」と伝わり、正行子孫には「（正行は）江戸幕府お抱えの刀鍛冶だった」という伝承がある。長男銀次郎は慶応3年（1867）に赤坂田町の出生で、これらを総合すると幕末の正行の居場所は江戸であった可能性が高い。

④飯高平五郎との関係

正行とつながりの深い人物に飯高平五郎がいる。平五郎は、幕府の仏語伝習所の第1期生で、箱館戦争時にジュール・ブリュネら旧幕府軍事顧問のフランス軍人たちの通辞もつとめた人物である。明治以降は、文部省や陸軍を経てベルギー公使館の通訳となった。この平五郎の娘・ハル（春子）と正行の次男・清次郎が明治30年代に結婚し、両家は縁戚関係となった。

濱田家と飯高家が接点を持った時期は不明だが、旧幕臣で国際色豊かな飯高家とつながりがあったことは、正行の立ち位置を知る上で参考になる。平五郎に関する情報はこれまで多くはなかったが、ご子孫による調査成果により、肖像写真や明治以

降の動向を知ることができ、一つの成果となった。

(2) 明治前半の乞田鍛冶

①明治初期の動向

明治3年(1870)の「貝取村戸籍」(国文学研究資料館所蔵富沢家文書)から乞田鍛冶兄弟が当時貝取村にいたことが判明する。文蔵はこの頃「農間鍛作職」として貝取村内に一家で居住していた。長吉(正行)は、貝取村本家に長兄や父助左衛門、妻子と同居していたが、同年閏10月には下保谷村の「慶助後家商売店」に妻子と出稼ぎに出ている。多摩市内にはもうひとつの「明治3年戸籍」が残されており、明治6年頃までに及ぶ追記から、長吉が明治6年頃「神田区元柳原町28番地」に転出したことが判明する。転出先の4軒隣には、刀剣商で内国勸業博覧会の出品の斡旋もおこなった福田徳兵衛の住居があった。

②「濱田銀太郎」による欧米模造農具の製作

明治8～9年(1875-76)、長吉と同じ住所の「濱田銀太郎」という人物が、勸業寮農具掛(明治10年より勸農局)に対し、137点に及ぶ大量の農具を納品し、1,000円余りの代金を得た。検討の結果、銀太郎は長吉(正行)と同一人物である可能性が高い。銀太郎納品の農具は西洋農具の併用が試みられていた下総取香種畜場の開墾用であり、「剣ぶらう(プラウ)」「英ノはろう(ハロー)」などの欧米模造農具と「四輪荷馬車」などだった。明治10年(1877)、上野で開催された第一回内国勸業博覧会の出品では勸農局から濱田銀太郎の製品が出品された。銀太郎は内藤新宿試験場(現・新宿御苑)にて欧米模造農具を製作していた。銀太郎が作った可能性のある欧米模造農具は、三里塚御料牧場記念館や東京大学農場博物館などに残されている。なお、第一回内国勸業博覧会には、兄の文蔵も貝取村からマンノウなどの農具を出品し、褒状を得た。

③明治13年の出店と渡米

兄弟の転機は明治13年(1880)である。文蔵は原町田に「乞田鍛冶屋」を出店することになった。現・小田急線町田駅そばで、乞田鍛冶屋は商店街の草分け的存在だった。

明治29年(1896)に文蔵が亡くなった後、長男久作は乞田鍛冶屋を継ぎ、次男寅治郎は四男四郎とともに府中で「鍛冶寅」を開店した。貝取村時代からの一番弟子・竹内喜之助は大正2年(1913)に町田の浄雲寺そばに店を出した。乞田鍛冶屋は文蔵の頃からひょうたんの刻印を使っていたと思われ、ひょうたんの刻印は弟子たちも用いた。彼らは「ひょうたん鍛冶」と呼ばれ、腕が良いことで評判をとり、その名は近隣にとどろいた。

一方、神田に出た正行は明治13年(1880)3月、長男銀次郎とともに「農業器械製造修行」を目的にサンフランシスコに渡った。長男の銀次郎をアメリカに残し、9月頃に正行は帰国した。その後明治14年に神田大火がおこり、正行の動向は明治30年までほぼ不明となる。

(3) 渡米した息子たち

①渡米後の銀次郎と兄弟たち

アメリカに残った長男・銀次郎は、在米日本人キリスト教

組織である「福音会」の世話になり、サンフランシスコ市のリンカーン小学校へ通った。「福音会記録」には、讚美歌を歌い、演説をする銀次郎の姿が記録されている。福音会は分裂を繰り返し、銀次郎は転会を経て最終的には1886年に設立された日本基督教青年会に参加する。銀次郎の弟の清次郎、(深山)喜之助も渡米し、明治20年代には兄弟3名がともに日本基督教青年会の一員として、アメリカから日本に寄付をしている。

銀次郎はやがてドクトル・カグスウェル専門学校、カリフォルニア大学に進み建築学を学んだ。病気で大学を中退した後、複数の工学博士に師事して鉄骨建築を学び、オークランド市のドイツ工学博士の顧問技師となり、現地の建築を監督した。

②博覧会と銀次郎

銀次郎は博覧会とも無縁ではなかった。在米中の1890年～1897年にかけて、サンフランシスコ勸業博覧会等に建築図や模型などを出品し、受賞している。1894年のカリフォルニア冬季国際博覧会では「木造家屋模型」と「邸宅ならびに羅馬教寺想像建築図」を出品し、意匠で第二等銀牌、技術で第三等銅牌を獲得した。なお、カリフォルニア冬季国際博覧会には、麥花塚の建碑式に立ち会った町田の橋本柳一も訪れていた。

③息子たちの帰国

明治31年(1898)11月に銀次郎は帰国し、清次郎・喜之助もそれに近い時期に帰国したと思われる。

銀次郎は明治33年に神田に建築事務所を開設し、明治34年(1901)2月に眞水英夫の推薦により建築協会に加盟する。眞水は銀次郎と同世代で、帝国図書館の初期の設計を担当した人物であった。眞水は銀次郎帰国直前の明治31年(1898)夏～明治32年(1899)2月に帝国図書館の調査で渡米している。

明治34年(1901)7月、銀次郎は海軍の佐世保鎮守府の技師として採用される。銀次郎を推薦したのは幕臣・渡辺升を父に持ち、初代帝国ホテルの設計者としても知られる渡辺讓である。当時臨時海軍建築部技師であった渡辺は、「鉄骨建築」を期待して銀次郎を推薦している。

銀次郎は佐世保鎮守府経理部に建築技師として配属され、日露戦争の際には旅順に赴任した。海軍を退職後独立し、大正6年(1917)に茨城県大子町の大子銀行本店を設計している(施工は木田保造)。大子銀行は「街かど美術館」として現存し、平成29年(1896)に国指定登録有形文化財になった。銀次郎は大正10年(1921)より、再び横須賀海軍嘱託技師となり、伝書鳩の研究家・武知彦栄とともに軍用鳩の鳩舎を設計した。

(4) 乞田鍛冶と自転車

①明治30年の外国人との合同遠乗り会の世話役として

明治14年(1881)以降消息不明だった正行が再登場するのは、息子たちの帰国と相前後する明治30年(1897)である。この年11月におこなわれた「大日本双輪倶楽部」と横浜居留地の外国人団体「日本バイシクル倶楽部」の合同遠乗り会で世話役を務めたのが正行だった。

この遠乗り会は明治30年6月のヴィクトリア女王即位60周年記念の際、横浜にて、大日本双輪倶楽部を日本バイシクル倶楽部がもてなしたことの返礼として開催されたものだった。

当日は総勢 100 名以上が参加し、菊と国旗をあしらった自転車車が用意され、向島小松園まで遠乗り会を催した。その後、上野精養軒で懇親会を開催し、大日本双輪倶楽部代表の秋山定輔と日本バイシクルクラブのエイトンが演説をして交流を深めた。

②神田に濱田自転車店を開店

合同遠乗り会の翌月の明治 30 年 (1897) 12 月に正行は「濱田自転車店」を神田錦町 1 丁目 2 番地に開店した。店舗は津久井郡出身の梶野仁之助の「梶野自転車店」を受け継いだものであった。濱田自転車店の特色は、①アメリカのランブラーなど欧米の新型自転車の輸入販売を担ったこと、②熟練の技師自らが廉価で迅速に修理すること、③欧米に習い屋内練習場を設けたこと、などであった。濱田自転車店の広告は開店からほどない明治 31 年 (1898) 2 月に静岡民友新聞にも広告が掲載され、これが静岡初の自転車店の広告となった (谷田貝一男氏・村井裕氏ご教示)。正行は大日本双輪倶楽部の幹事にもなり、明治 34 年の雑誌『自転車』で十傑の投票では、「実験家」の 10 位、「技術家」の 4 位に入っている。

濱田自転車店は、次男・清次郎が早々に受け継いだ。明治 34 年 (1901)、清次郎は自転車店営業のため北京への渡航を試み、陸軍に御用船への乗船を申請している。

③濱田自転車店の利用者

濱田自転車店は練習場を併設していたため、さまざまな人が濱田自転車店を利用した。子孫には「宮様や俳優なども利用した」と伝わる。

徳川慶喜の弟・昭武も濱田自転車店を利用した。昭武の自転車乗車記録には濱田自転車店までの往復記録があるほか、自転車修理のため昭武のもとを清次郎が訪れた記事もある。明治 35 年 (1902) の昭武一行による埼玉県春日部および千葉県稲毛への自転車遠乗りには、三男喜之助が自転車屋として随行した。

④町田の「武相交輪会」と自転車



武相交輪会 (前列 2 列目の右端 2 名の後ろの無帽の人物が鍛冶屋) 浜田文重氏所蔵

多摩地域には明治 30 年代後半から自転車同好会が見られ、町田では明治 40 年 (1907) に横浜貿易新報主催の自転車遠乗り競争会の休憩所が置かれた。また、明治 42 年 (1909) 頃より小川梅園に「武相交輪会」のグラウンドが作られ、明治 43 年 (1910) 2 月に自転車競走会が開かれた。「武相交輪会」

の実態は長らく不明であったが、町田市立自由民権資料館の小川梅園日記の調査により、村野常右衛門を代表とする自転車同好会であったことや、グラウンドづくり・競争会のようなすが判明している。

文蔵の子孫宅には、「武相交輪会」の旗を持つ人々と選手、乞田鍛冶屋の半纏をまとった若者らの写真が残されている (写真)。写真の若者が武相交輪会にどのように関与したのかは定かではないが、武相交輪会の自転車競走会で花火の打ち上げが記載されており、別の史料に乞田鍛冶屋が「煙火世話人」と記されたものがあることから、花火への関与だった可能性も残る。

⑤明治以降の「刀鍛冶」としての乞田鍛冶の痕跡

乞田鍛冶兄弟は明治以降、刀とは無縁になったように思われるが、『日本刀名鑑』には乞田鍛冶が「三多摩壮士の杖刀」を打ったという話が記載される。また、正行は明治 40 年 (1907) に短刀を製作し、実物が文蔵系統の子孫宅に伝来する。文蔵の長男久作は日露戦争時にサーベル製作に従事し、久作の甥にあたる一郎は太平洋戦争時に中国大陆で廢材で軍刀を打ったと伝えられている。これらのエピソードからは、刀の技術が明治以降も乞田鍛冶の弟子たちに継承されていたことがうかがえる。

⑥乞田鍛冶兄弟の交流

乞田鍛冶兄弟は幕末から多摩と江戸で活動しており、ほとんど互いに関わりなく歩みを進めるが、『日本刀名鑑』には「兄弟鍛冶」として記される。『日本刀名鑑』の記載は、町田の三橋國民氏が乞田鍛冶子孫の浜田文吾氏に聞き取り調査をして書かれたものと子孫に伝承されており、「乞田鍛冶＝兄弟鍛冶」は子孫の認識だったと考えられる。両者の交流をはかる史料は乏しいが、久作の見舞帳や香典帳には銀次郎や正行妻の名前が見えており、何らかの交流があったと推測できる。

3. 展示と関連企画の開催

(1) 展示の開催

以上の内容は、御子孫である宇井久美子氏 (文蔵御子孫)、浜田秀隆氏 (正行御子孫)、飯高昇氏 (飯高平五郎御子孫) の調査成果を軸に、各方面の専門家や協力者からのご教示を得ながら調査を進めたものである。

展示では、こうした乞田鍛冶の動向に加え、多摩市内の農兵隊の資料や、多摩市出身の自由民権家・伊野銀蔵、柚木芳三郎の足跡を絡めた。資料が手薄となる部分の補完をする意味もあったが、より多くの多摩地域の実物資料を紹介するという意図もあった。結果として当時の地域社会の一端を示すことになり、話に厚みが出て、面としての歴史が感じられるようになった。また、柚木家に伝わった「天狗煙草」の看板など新たに見つかった資料もあり、地域資料の発掘にもつながった。

展示では、上記内容を 4 つの章に分け、最後を銀次郎の話とし、①「幕末の多摩と乞田鍛冶」②「明治以降の乞田鍛冶」③「乞田鍛冶と自転車」④「米国での学びと鉄骨建築」という構成にした。第二会場では東京 2020 オリンピックの自転車ロードレースのコースの定点撮影写真などの展示をおこなった。

会期は 68 日間而入場者は 16,933 人であった。会期中に学芸員による展示解説を 4 回実施し、合計 86 人の参加があった。

(2) 関連講演会の開催

展示の内容は多岐にわたったため、展示では深め切れない部分も多かった。そこで各テーマに関する専門家を招いた講演会・講座計7本を実施した。講演会として①「多摩の渡米青年の志」(講師・新井勝紘氏)②「幕末期・多摩地域の農民の武装～連光寺村農兵隊・刀剣講を中心に～」(同・岩橋清美氏)③「刀剣の製法・鑑賞法と乞田鍛冶の刀剣」(同・石井彰氏)④「近代日本における欧米農具の導入政策と博覧会」(同・國雄行氏)⑤「自転車の歴史と乞田鍛冶」(同・谷田貝一男氏)⑥「武相交輪会と町田の小川梅園」(同・井上茂信氏)(⑤⑥は同日の総合講演)を、講座として⑦「乞田鍛冶ゆかりの地を歩く」(筆者)を実施した。参加者は総計340人であった。いずれも展示内容の掘り下げにつながり、参加者からは好評だった。

(3) 関連演劇の開催



上演風景

当館では、2018年より企画コーナー展示で寸劇を実施しており、本特別展でも実施することとした。多摩市在住の俳優・永滝元太郎氏と、博物館での双方向的な演劇WSに実績がある「ミュージアムシアターワークショップ」(MTW)とゲスト俳優の方々(村瀬千佳子氏、日名子祐多氏)に依頼した。

MTWメンバーには展示が始まってから会場をご案内し、脚本を練っていただいた。検討の結果、「文明開化ヒストリア 刀鍛冶の挑戦～麦花塚から自転車ロードレースまで～」と題し、20-30分程度で展示室内を観客とともに廻りながら兄弟の人生をたどり、自転車ロードレースの展示会場につなげる内容となった。初の展示室内を廻る形式で観客誘導などに心配があったため、市民演劇参加者などをお願いしてゲネプロを見ていただき修正を加えた。当日の観客は11時の回33名、14時の回47名の計80名となり、盛況であった。出演者・スタッフの誘導があったためか特に混乱や事故はなかった。ただし、狭い通路などでは展示ケースに接近することも多くなり、今後同様な公演を開催する場合は展示設計の段階から劇を想定した配置を検討する必要があると思われる。

内容的には、やや難解だった展示に対し、演劇での表現はストーリーがわかりやすくかみ砕かれており、楽しく、内容理解の手助けになったという声が多かった。また、展示の早い段階でこのような公演を実施してほしいという声も見られた。

(4) 来館者の反応

今回の展示では新選組関連の刀剣を展示し、ツイッターで拡

散されたこともあり、若者の来場が通常よりも多かった。解説パネルが多く難解な部分もあったが、展示をじっくり読み込んだり、学芸員の解説や演劇を見た人などからはおおむね好評を得た。以下にアンケートの一部を紹介する。

・時代の変化に、刀鍛冶がいくつもの職業を変えていく事をたて糸にして、農兵隊、新撰組、文明開化、自由民権運動等を横糸とし、時代にほんろうされながら生き抜いてきた人々の姿がうかびあがり、大変興味深かった。

・濱田家の成長物語かと思っていましたが、どうしてどうして立派な展示でたいへん感心しました。刀の現品や古文書がしっかり見られ、解説も納得です。明治初期の時代をうつすイベント＝博覧会や外国製品の活用など、新しい知見にふれました。これだけ多量の史料で文明開化の一端にふれてたいへんラッキーに思いました。

・2020年へと繋がる内容で、とても興味深かったです。日本の技術と世界を見て取り入れる文化の流れが見られました。貴重な史料をありがとうございました。

・ずっと住んできた多摩に、昔刀鍛冶がいて、明治時代の出来事に関わっていたという事実はとても興味深かった。特に新撰組隊士の刀を作っていたとか、自由民権運動の杖刀(隠し刀)等、歴史の授業で習っていた事と結びつくのは面白い。ここまで詳しく調べることができたのはご子孫の方の力によるところが大きいの、その苦労は想像以上だと思う。

・多摩の刀鍛冶が素晴らしい業績を残していることを始めて知りました。多摩の村から世界に目を向けて行動をおこし、その展示品が現在に残る。これらを今回特別展で見れたこと感謝しております。

・かつてのこの地域に刀鍛冶がいたことも驚きですが、この兄弟の活躍が、幕末～明治に農具や自転車などの関わり、展開があることにも驚きました。よく資料を集めて展示されたと思います。

4. おわりに

乞田鍛冶の足跡は、単に鍛冶屋の歴史というだけではなく、博覧会、欧米模造農具の製作、自転車輸入、鉄骨建築など多様な糸口をもつ内容だったと思われる。未解明の点も多く残るが、今後さらに明らかになっていくことを期待したい。

展示開催後、地元の方などから「実は明治時代に渡米した先祖や親戚がいる」という話を複数うかがった。明治期の気運のなかで、横浜に出たり、海外に渡ろうとした人々は思いのほか多かったと思われる。明治初期の海外渡航者に関しては一覧できる書籍も刊行されているが、必ずしも網羅的なものではなく、正行や銀次郎らの渡航についても収録されていなかった。彼らの渡航に関しては、海軍関連の研究に銀次郎の履歴があったことを契機に、御子孫自身が外交史料館や防衛資料館・厚生労働省を調査して判明したものであった。同様にまだ判明していない渡航者の足跡は数多くあるものと推測できる。こうした調査には御子孫自身による協力が不可欠となるが、今後さまざまな渡航者たちの足跡が明らかになる可能性は高いだろう。

(※紙面の都合上、個々の協力者に言及できませんでしたが、ご教示ご協力いただいたすべての皆様に御礼申し上げます。)

令和元年度2つの企画展

立川市歴史民俗資料館 高橋 学

■はじめに

2019年は、平成から令和へ改元が行われた。立川市歴史民俗資料館では、新元号「令和」の出典が『万葉集』であることに絡め、企画展「立川の遺跡2019」展内では、昨年度の発掘調査速報展示に加えて、特集展示として「万葉集の頃の東国～奈良・平安時代の立川」を開催した。

また今年度は、明治22(1889)年4月11日に甲武鉄道(現JR中央線)の新宿～立川間が開通し、立川駅が開業してから130年目に当たることから、秋季の企画展として「立川てんしゃば物語～立川駅と立川の近代化～」を開催した。

今回の特集からはやや外れているかもしれないが、本稿ではこの2つの企画展について紹介したい。

■「立川の遺跡2019」

「立川の遺跡」展は毎年夏季に開催している企画展である。前年度の発掘調査速報展とテーマを決めた埋蔵文化財(遺跡・遺物)主体の特集展示で構成している。2019年は、5月に令和に改元したことを受け、『万葉集』に絡めた特集展示「万葉集の頃の東国～奈良・平安時代の立川～」を開催した。開催期間は例年通り夏季の令和元年7月23日～9月1日であった。

展示は「Ⅰ『万葉集』と多摩」、「Ⅱ 奈良・平安時代の立川」、「Ⅲ 多摩の牧と武士団」、「Ⅳ 中世立川氏へ」で構成し、展示のコンセプトは、『万葉集』を糸口として「立川のルーツを探る」であった。

「Ⅰ『万葉集』と多摩」では、昭和43年刊行の『立川市史』においては、万葉集の「赤駒を山野にはがし 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」という一首と絡めて(横山に対する立[縦]川)、立川の由来を説明していることを取り上げた。すなわち「多摩の横山」とは多摩丘陵を指すとし、「立川」とは多摩川のことで、国府(府中)からみて上流方向にある地域を「立川」と呼んだとし、その語源は7世紀に遡るとのではないかとしている。「Ⅱ 奈良・平安時代の立川」では、当該期の立川市内の遺跡(下大和田・大和田遺跡、台の下遺跡)の概要を展示した。当時は市域が武蔵国多摩郡に属することを示し、10世紀の『倭名類聚抄』では、多摩郡の中には10の郷(郡の下の行政単位)があり、その中の「小楊(おやぎ)郷」を、国立市の青柳から立川周辺に比定する説を紹介した。展示では下大和田遺跡が一般の集落に比して掘立柱建物が多く、その中には格が高いとされる庇付きの建物があることなどを遺構写真などで示し、下大和田遺跡が小楊郷における「官衙関連遺跡」ではないかという意見も併せて紹介した。「Ⅲ 多摩の牧と武士団」では、平安時代に編集された『延喜式』には武蔵国内に御牧(勅使牧)が多くあることを取り上げた。その中でも小川牧、由比牧、小野牧は多摩郡内にあることが確認されている。立野(たちの)牧については横浜市説が有力だが、立野という旧地名(立川市富士見町付近)から立川周辺説があることを紹介した。市内の遺跡からは馬具などの牧関係遺物は出土していな

いので、東京都埋蔵文化財センターからは鉄製馬具(轡)を、日野市教育委員会からは焼印を借用して展示した。「Ⅳ 中世立川氏へ」では、中世に立川周辺の土豪であった立川(河)氏を取り上げた。市指定有形文化財である『立川文書』『立川系図』を展示した。系図によると立川氏は、西党日奉氏に属している。西党には立川氏のほかに由井・田村・土淵・平山・由木・高幡・小川などの諸氏があり、主に国府より西の多摩川・浅川・秋川周辺が勢力範囲であった。立川氏は由井氏から分かれるが、この由井氏～立川氏の系図の中には、「駄所」や「駄五郎」などの注記がある人物があり、馬を使役する運送担当の役所に関わっていたことが推定されることを示した。

展示以外のイベントとして、ギャラリートーク(展示解説)とミニ体験教室を開催した。ギャラリートークは期間中2回開催した。ミニ体験教室は、マイギリ式火おこしと石器体験で、土日の随時開催とした。この二つの企画は、10年以上行っているが、ここ数年は参加人数が低迷しており、今後の課題といえる。

■「立川てんしゃば物語～立川駅と立川の近代化～」

立川の近代化は、甲武鉄道の開通、立川駅の開業によって始まったともいわれており、甲州街道沿いの農村であった立川村が発展し、今日の立川があるのも甲武鉄道が開通し、立川駅が設置されたからといっても過言ではない。当館では平成22(2010)年に「甲武鉄道と立川」展、平成26年に「青鉄と五鉄」展を開催しており、今回は立川駅を中心に据え、駅と近代化というテーマで企画展をすることとした。

タイトルは「立川てんしゃば物語～立川駅と立川の近代化～」とした。『てんしゃば』とは停車場の多摩方言であるが「てんしゃば」って何?と引かかるように、あえて「てんしゃば」とした。開催期間は、実際の開業日である4月11日に合わせ、春季にすることも考えられたが、通常当館では、春季には「新収蔵品」展を開催、秋季にはテーマを変えて企画展を開催している。秋には「東京文化財ウィーク」があり、企画事業にすれば文化財ウィークのガイドパンフレットに掲載され、広く都内に周知されたいと考え、秋季の企画展とし令和元年10月22日(火)～12月15日(日)の開催とした。

当館の所蔵資料だけでは、展示構成することは難しかったので、国立公文書館、東京都公文書館資料をパネルにして展示した。青梅線に関しては青梅市郷土博物館が所蔵している青梅鉄道資料を借用して展示した。

展示では導入部として、特別展示室入口手前に展示ケースを設置し、昨年4月11日の立川駅での130周年イベントにおいて、配布、販売されていた「中央線開業130周年イベント関連グッズ」や130周年ヘッドマークを付けた中央線電車写真を展示した。

特別展示室内は、シンプルに時系列を追った「1. 立川停車場開設」、「2. 明治末期～大正時代の立川駅」、「3. 昭和～戦

中の立川駅、「4. 戦後～平成の立川駅」の展示構成とし、明治から昭和・平成までの立川駅とその周辺の変遷を追うこととした。

「1. 立川停車場開設」では、立川駅の開業～明治30年代を扱った。立川駅の駅舎が立川村の中心地に近い南側から北側に変更した経緯（立川村は甲武鉄道に水を提供することを躊躇したが、駅北側の砂川村が積極的に水を提供した）を「鈴木家文書」を用いて説明した。また明治30年代の立川駅付近の様子を、当時のスケッチを基に彩色した立川市指定有形文化財「立川村十二景」の複製を展示して示した。明治27年に青梅鉄道の立川～青梅間が開通したが、当時青梅鉄道は軌間（レールとレールの間）が甲武鉄道の1,067mmに対し、より安価な規格の762mmであったので、列車が直通できなかったことを、視覚的に理解できるように、当館所蔵の古レールを実際のスケールで配置・展示した。「2. 明治末期～大正時代の立川駅」では、明治39（1906）年の甲武鉄道の国有化から大正11（1922）年の立川飛行場開設までを扱った。立川飛行場が設置され、陸軍飛行第五大隊が岐阜県各務ヶ原から移駐してきたことは、以降の立川の歴史を方向づけることとなった。飛行場ができたことにより、飛行場の周辺には官民の飛行機関連工場などが設置され、人口が急増し立川は急速に発展した。絵葉書などで立川駅や周辺の写真が遺っているのは、当期以降なので、立川駅や駅前周辺の写真なども展示した。「3. 昭和～戦中の立川駅」では、昭和初期の立川駅の大改造を中心に取り上げた。昭和4年に国立～立川間が電化され、同年12月には南武鉄道、昭和5年7月には五日市鉄道が立川駅に乗り入れ、ほぼ現在の形に近い交通網ができあがった。それに伴い立川駅も大改造され、ホーム間を地下道で結ぶモダンな駅へと改造された。駅周辺も、南口では昭和初期から昭和10年代に耕地整理、北口では戦時中に建物疎開がそれぞれ行われ、現在の駅周辺の町並みの原点となっていることを紹介した。「4. 戦後～平成の立川駅」では戦後～多摩モノレール開通までを主に扱った。昭和40年代までは主に写真資料、昭和50年代以降は、例えば立川駅の駅ビル化や国営昭和記念公園開園など鉄道や町づくりの重要な節目には記念切符が発行されることが多く、当館所蔵の記念切符類を展示した。

各コーナーとも展示資料は図面や写真を主とし、駅と町の変化（近代化）について重点をおいたので、鉄道に詳しい方にとってはやや物足りない展示だったかもしれない。また鉄道（駅）以外の社会インフラ、例えば道路、上下水道、電気、電話などの普及も近代化の重要な指標になるが、それらについてはほと

んど触れることができなかった。

展示関連イベントとして、企画展関連講演会と3回の見学会（立川の近・現代を歩く、立川の近代化遺産を巡る、五鉄跡を歩く）、3回の展示解説を計画した。講演会は「鉄道忌避伝説と立川」・「青梅短絡線敷設の経緯」の2本立てで、後者の講師にはたましん地域文化財団歴史室長の保坂一房氏をお迎えした。前者については筆者が展示担当者として演台に立つこととした。自身が話すことについては逡巡したが、今回の企画展で調査したことのすべてが展示に反映されているわけではなく、些少なりとも市民の皆様へ調査の結果を還元すべきと考えたからであった。見学会は各20名の定員であったが、各回とも満員御礼で何人の方をお断りすることとなった。ただ「立川の近代化遺産を巡る」は、降雨のため中止となってしまった。見学会参加者のアンケート結果では、企画展を見学済もしくは見学予定ありという参加者は、全参加者の2割程度と思いのほか少なく、見学会が盛況であっても来館者増に結び付いていないことが判明した。見学会参加者が来館したくなるような「仕掛け」を考える必要がある。今後の課題である。



見学会の様子

■おわりに

当館では例年春季に新収蔵品展、夏季に遺跡展、秋季に企画展を開催している（令和2年度はオリンピック・パラリンピック対応の関係で変更予定）。今後もより多くの方に興味・関心を持っていただき、より多くの方に足をお運びいただけるように、さまざまな企画を展開してまいります。

最後となりましたが、この2つの企画展にご協力頂いた東京都埋蔵文化財センター、日野市教育委員会、青梅市郷土博物館の皆様には感謝・御礼申し上げます。

特別展「豊田のむかし」

日野市郷土資料館 矢口 祥有里

日野市郷土資料館では、特別展「豊田のむかし」を、令和元年（2019）10月5日から12月8日まで、日野市立新選組のふるさと歴史館を会場にして開催しました。のべ59日間の開催で、4,452人の来館者がありました。

豊田は、日野市の中央やや西寄りに位置する地域で、江戸時

代には豊田村といい、市域で最も早く文禄3年（1594）9月に検地が行われ、幕末まで旗本大久保氏の知行地でした。『新編武蔵風土記稿』には東西18町（約2km）、南北11町（約1.2km）、家数75軒とあり、浅川沿いの低地には水田と民家があり、北側斜面上と台地上には畑や山林が広がる純農村でした。

特別展開催までの経緯

昭和47年(1972)から平成10年(1998)度まで行われた日野市史編さん事業の中で、市域の古文書調査が行われ、目録が作成されました。このとき、豊田地区からは、山口高靖家文書1,412件と遠藤重義家文書149件の目録が作成されました。ともに名主を勤めた家で、特に山口家の点数が多かったこともあり、豊田でこれ以上の調査はあまり行われなかったようです。市史編さん事務局の解散後、事業を引き継いだ日野市ふるさと博物館は、平成17年に日野市郷土資料館と改称され現在に至りますが、平成25年6月に山口家から市史目録にある資料の寄託を受けました。

そして平成26年、宅地造成のため、山口家の長屋が取り壊されることとなりました。この長屋は、明治7年(1874)に豊田学校が開校した最初期に使われた建物で、豊田用水沿いに続く黒板塀は、豊田では馴染み深い景色でした。これを機に日野市生涯学習課文化財係が、長屋の建物調査とその北側のかつて麦酒醸造場だったと言われる場所の発掘調査を行いました。



写真 豊田学校が最初に置かれた山口家の長屋

この過程で、文庫蔵および穀蔵の中に、市史編さんでは未調査だった資料群が大量に残されていることが判明しました。中には大正時代末期に撮影されたガラス乾板写真など、貴重なものが含まれており、平成27年度に本格的な資料調査を行うこととなりました。その内容は、文庫蔵・穀蔵の建物調査、ガラス乾板写真のデジタルデータ化、そして古文書調査の3点でした。今回の特別展は、この資料調査の成果報告の面を持つものです。

豊田村旧名主山口家の新規古文書調査

このうち、古文書の調査は、平成28年1～3月にかけて日野の古文書を読む会研究部会(会長上野さだ子氏)によって行われ、計1,320件の目録が作成されました。平成27年度の委託調査終了後も、月2回の同会のボランティア活動により、山口家の古文書整理は継続されています。また、平成30年度には、麦酒醸造関係帳簿など計24点の解読が同会に委託されました。さらに、平成29・30年度には、一部資料の撮影を委託で行いました。市史編さん時の資料は、高価なマイクロフィルムに撮影されています。しかし、情報量の多さやコスト、利活用の面

から考え、今回新たに見つかった山口家の資料は、カラーでデジタル撮影することにしました。絵図・地図類は彩色されているという理由のほかにも、大型の資料が多く、広げる際には手間がかかり場所も必要なこと、見たい細部を拡大できるなどの点から、デジタルデータにしておくことが最も望まれる資料でした。

イベント「ガラス乾板から見る100年前の豊田の風景」写真展

平成30年9月～12月まで、特別展に向けてのイベントとして、パネル展「ガラス乾板からよみがえる100年前の豊田の風景」を開催しました。先にデジタルデータ化したガラス乾板写真の中から、被写体や場所が特定できる写真や、農業などむかしの暮らしぶりが分かる写真、関東大震災の被災状況など20枚を厳選し、A2サイズのアلمフレーム付パネルを作成し、展示しました。会場となる郷土資料館は豊田地区から離れているため、豊田小学校および豊田地区に位置する中央図書館でも出張展示を行いました。併せて講座やギャラリートークも行い、少しずつ豊田に対する人びとの関心を高めていくように仕掛けをしました。

展示の構成

平成から令和への改元があり、いよいよ特別展の開催となりましたが、日野市の博物館で、豊田地区をメインに取り上げる展示は今回が初めてでした。タイトルは「豊田のむかし」としました。「豊田のむかし」というタイトルからは「何でもあり」な印象を与えますが、その堅苦しくない感じが自分たちの住む地域の展示、イコール「わが事」であると感じてもらえるのではないかと考えました。こんなものがあつたのか!と、見る人が何かしらの発見をして、話題を共有し合い、まずは地域に興味を持ち、調べてみようとする第一歩としてもらうことが、ねらいでした。

会場の都合で、展示室が2室に分かれるため、第一部は豊田地区の歴史、第二部は山口家の資料紹介という二部構成にしました。

第一部の豊田地区の歴史は、古文書と村絵図からたどる江戸時代と、明治・大正時代の①地租改正(土地制度と税制の変革)、②豊田小学校の歴史、③甲武鉄道の開通と豊田駅の開業、④府立農事試験場豊田分場の設置と耕地整理、をトピックとして紹介し、戦前の工場誘致と社員住宅の増加、戦後の多摩平団地の開発、減少する水田と用水の意義、進行するバイパス工事と区画整理、という現在の話へとつなげました。

展示内容① 豊田の近代化を中心に

豊田村は明治22年の市制・町村制で他7か村と合併して「桑田村」となり、さらに明治34年4月に「日野町」に合併しました。豊田小学校は明治7年に開校し、日野町合併後の明治41年に日野尋常高等小学校(現・日野第一小学校)の分教場となり、昭和21年に本校から独立しました。昭和30年に「日野第二小学校」と改称されましたが、地元からの要望で平成27年に再び元の「豊田小学校」に改称されました。この間、ずっと「ああ豊田豊田小学校」という校歌を歌い続けてきたことが決め手となりました。「豊田」という地名に対する、住民の思い入れ

の強さが伝わります。ここでは、豊田小学校の生徒が明治35年の菅原道真一千年忌に、村内の天満宮（天神社）に奉納した幟旗などを展示しました。この幟旗は、生徒たちがお金を出し合って布を買い、当時の校長が揮毫したと伝わるもので、長さが約5メートルあります。しかし、天満宮はすでに合祀されて社殿等も取り壊されているため、なかなか飾る機会がなかったものです。

③の甲武鉄道（現JR中央線）は、ちょうど令和元年が開通130年にあたり、各所で記念展示やイベントが行われましたが、市域にも日野駅と豊田駅の2つの中央線の駅があります。両駅は日野宿と桑田村による誘致合戦の末、日野駅が明治23年1月、豊田駅が明治34年2月に開業しました。つまり令和2年には日野駅開業130年、同3年には豊田駅開業120年を迎えます。駅周辺の写真と昭和30年代の駅前商店街の地図などから、区画整理が進んで風景が一変した現在とを比べてもらいました。

また、明治34年から大正9年（1920）まで、豊田には東京府立農事試験場の豊田分場（第一分場）があり、さまざまな試作が行われていました。試験場の技師の勧めで、豊田では明治43年から大正2年にかけて、東京府下で最も早いと言われる耕地整理が行われました。大正4年建立の「耕地整理記念之碑」が区画整理で近くの公園に移転する際に、拓本をとっておいたものを展示して解説を付け、耕地整理前と整理後の地図を見比べてもらいました。ふだん町の中に何気なくある石碑に、難工事に挑んだ先人たちの労苦と収穫増への期待が刻まれていることを知ってもらえらうでした。

展示内容② 山口家について

第二部は、山口家に関する資料紹介です。『新編武蔵風土記稿』の中で、豊田村の旧家「百姓平左衛門」として登場する山口平左衛門（徳高）について、領主の大久保氏から「古来よりの由緒」により先格の通り「郷土」に仰せつけられ、村方取締目付役を勤めたという資料が見つかりました。名主たちは平左衛門と相談の上、小前の者を取り締まるよう申し渡されています。山口家は文政5年（1822）、平左衛門の子の熊吉（平太夫高広）から豊田村の名主を勤めるようになりました。高広の長男新吉は、千人同心や名主見習を経たものの元治元年（1864）に病死しました。そのため、熊川村（福生市）の石川家へ婿養子に入っていた次男の仲次郎が妻子を連れて実家に戻り、名主を継ぎ、平太夫（高彬）を襲名します。平太夫（高彬）は、兄新吉の子である清之助（平太夫高頼のち高謙）を養育して、自分の娘と結婚させました。山口平太夫（高彬）、清之助、高一の親子3代にわたり、耕地整理など豊田の近代化を象徴する大事業には、いずれも関わりを持っています。

昭和40～50年代の市史編さん時には、公的な性格を持つ村政資料の調査が主であり、山口家の家政に関する資料は私的な性格を持つものと考えられたため提供されておらず、未調査でした。しかし、新たに調査された資料の中には、例えば旗本大久保家の家政に関して、同じく大久保家の知行所となっている他5か村の名主たちと交わした書簡など、公的な性格を併せ持つ、全くの私文書とは言えないものが含まれていました。今

後ますます時代とともに、資料の持つ意義が新しく見出されることが増えていくことでしょう。さまざまな視点から、改めて古文書を見直してみる調査も必要になることと思われます。

山口麦酒からTOYODA BEER（豊田ビール）へ

山口家では、明治20年代に麦酒醸造が行われていました。このことは、福生市の石川酒造文書を調査した牛米努氏や北村澄江氏などの研究から明らかにされていましたが、今回の調査で山口家から麦酒醸造に関する帳簿などの資料が見つかり、先の発掘調査の成果も併せてさまざまなことが分かってきたので、山口麦酒については大々的に取り上げました。

近代に始まるビール産業は、資本家たちから新しい投機先として期待され、明治10年代には日本各地で個人経営の麦酒醸造所が作られたといえます。山口家の場合、それまであった酒造場を麦酒醸造場に改築し、設備も一新して臨み、明治19年から28年頃までの約10年にわたり、麦酒醸造を行ないました。今回見つかった『麦酒売上帳』によれば、山口麦酒はその多くが、浅草の洋酒商伊部猪三郎の元へ樽や壺で売られています。販売先は東京の他にも横浜や府中宿、八王子宿などで、東京経由で群馬の伊香保温泉へ販売された記録もありました。また近所の人買いに来ると小売りもしていました。甲武鉄道が八王子まで開通した際には、八王子駅開業を祝い、麦酒300壺が山口家から鉄道会社に寄附されました。当時の日本ではまだガラス壺が製造できなかったことから、横浜や神戸よりも相場の安い清国上海へ、洋酒の壺を買い付けに行き、それにビールを詰め替え、コルクで栓をして販売したことが、残された資料や、発掘調査で出土したさまざまな色や形の洋酒壺から分かりました。

明治20年代後半になると、地方のビール工場は、現在のキリンやアサヒといった大資本に合併吸収されていきました。山口家が麦酒醸造を廃業した理由は定かではありませんが、酒造蔵は蚕室に改造されました。

一方、石川家でも山口家をモデルに試験的に麦酒醸造を行ないましたが、2年ほどでやめ、日本酒醸造に専念しました。ただし、山口家で醸造した麦酒に石川家の持つ「日本麦酒」の商標レッテルを貼って販売するなどしていたようです。なお、石川家では平成10年から「多摩の恵」の名でビールの製造販売を再開しました。日野市では石川酒造（株）に依頼し、平成27年から「TOYODA BEER」を販売しました。さらに、平成30年には日野産大麦を100%使用した「PREMIUM TOYODABEER」を販売しました。近年の地ビール人気もあり、豊田ではクラブビール祭りが開催されるようになりました。このような地域おこしに、今後も資料群が活かされていけば良いと思います。

会場では展示の最後に、山口家に残されていた昭和10年代の8ミリフィルムを修復し再現した映像を流しました。中には、昭和13年の田植えの風景や、炭が出来るまでの様子、凧揚げなどが収められています。

また、関連事業として、牛米努氏による講演会「草創期の地方ビールと山口麦酒」、今尾恵介氏による講演会「豊田の地形と地名」、さらに見学会「豊田の七森を探る」を行ない、展示の内容を補足しました。

展示の準備を通じて、豊田地区の住民の方々と良好な関係を結ぶことが出来たことは何より大きな収穫でした。多大なご協力をいただき、本当に感謝しています。他にも、山口清之助が東長沼（稲城市）の漢学者窪全亮の奚疑塾で学んでいた縁で、窪全亮の研究を行う稲城市の市民団体「いなぎ草の根文化サロン」の方々と交流を持つようになり、市域を越えた広がりも生まれました。これからは豊田での調査は継続しますが、より充実した内容にして、広く公開できる機会を持てればと考えています。

写真 「豊田の近代」コーナーの展示風景



企画展「カメラが写した国立一本田家資料と市役所広報移管写真を中心に—」

くにたち郷土文化館 安齋 順子

はじめはごく僅かな人しか持つことの出来なかったカメラ。人々は特別な時に写真を撮り、その景色や人物を長く残そうとしました。やがて一般の人がカメラで撮影するのが当たり前の時代になり、より多くの写真が残されるようになりました。今では誰もがカメラを持ち、“スマホ”などをつかってだれでも簡単に写真を撮る事が出来ます。記念としての撮影だけでなく、多くの人に情報を伝える手段として写真は無くてはならないものになっています。

くにたち郷土文化館では、平成 28（2016）年に国立市に寄贈された本田家資料及び、当館所蔵の市役所広報移管写真を中心に、2019年10月19日～12月1日まで「カメラが写した国立一本田家資料と市役所広報移管写真を中心に—」を開催しました。

展示では明治・大正・昭和・平成と移りゆく時代の中で、カメラが写した国立の風景や人々の様子を紹介しました。副題にある、本田家とは江戸時代前期に国立市の前身である谷保村に移り住み、名主や村医者として活躍した旧家です。平成 28（2016）年、現本田家当主の本田啄夫氏より本田家住宅主屋（敷地含む）・薬医門、そして所蔵資料が国立市へと寄贈されまし

た。展示では、市に寄贈された本田家資料の中から写真資料の一部を紹介しました。本田家に残された写真資料には、明治期以前に撮影されたものもあり、その多くは写真館で写したのや、写真師を呼んで撮られたものと考えられます。今回展示した本田家の写真資料の多くは、昭和初期のもので、一般家庭ではまだまだカメラ普及していなかった時代に、本田家 15 代当主の本田定弘氏が自らのカメラで撮影した写真です。家族の肖像、甲州街道や谷保天満宮の祭礼の様子、大正 15（1926）年国立駅舎が開設された時の写真〔写真 1〕など、貴重な場面に立ち会った写真も存在します。

現物は数冊のアルバムにまとめられたもので、ありがたい事に年代や被写体が何であるかを示す情報が多く書き込まれています。貴重な古い写真があってもそれが何の写真であるか、判別することが難しい事例が多々ある中で、本田家の写真資料は展示を進める上で多くの手がかりを示してくれました。

今回の展示は、明治・大正・昭和・平成と時代の順を追って展示しました。明治・大正のころの写真は、本田家やその他の旧家に残るもので、多摩川の改修記念写真（明治 42 年



写真 1 国立駅舎開業の日 大正 15 年 4 月 1 日
(国立市所蔵本田家資料)



写真 2 西野芳寛の葬儀 大正 6 年 (当館所蔵)

/1909)、谷保天満宮の菅公一千年祭(明治35年/1902)に関する写真、西野芳寛金婚式(明治39年/1906)と芳寛葬儀写真(大正6年/1917)〔写真2〕などです。

他に、大正末から昭和初期にかけて撮影された写真資料に石川安子資料があります。立川の石川石材店に生まれた石川安子氏は大正8年(1919)から昭和はじめ頃まで谷保尋常高等小学校(現・国立第一小学校)の教師をしていました。展示では1冊のアルバムに収められた写真の中から一部を紹介しました。写真には時に短歌が添えられており、当時の情景とともに、その時の心情が分かる貴重な資料です。

国立は、大正の終わりから昭和の初期にかけて、箱根土地株式会社により村北部の雑木林を切り開き、商科大学(現・一橋大学)を中心とした学園都市としての開発が行なわれました。そのため、今回展示された写真も、開発が進む以前の昭和初期までは甲州街道沿いの旧村地域のもものが中心です。新に開発された地域に住む人々も徐々に増えていくこととなりますが、残念ながら現段階では昭和初期から戦後になるまでの写真は、ほとんど郷土文化館には残されていません。また写真をお持ちの方との繋がりも今のところ多くはありません。今回展示をしたことで、こういった課題を再確認することになりました。

戦前、戦時中の写真は、三田賢司氏より提供いただいた写真により構成しました。賢司氏の家は、甲州街道沿いに父親の高蔵氏が米店を開業し、戦前戦後と営んできました。展示した写真には、米の配達に使ったオート三輪の写真なども残ります。戦時中は、三田米店は配給所となり、父親の高蔵氏や叔父たちは戦地へ出征していきます。戦時中、多くの家族が離れる家族を想い写真を残したように、三田家に残る出征前に撮られた家族写真なども今回展示しました。

戦後、昭和20年代の写真は館所蔵のもの、また市内で写真を所蔵されている方の把握も少ない状況にあります。そんな中で、今回わずかですが紹介したのは平野武利資料です。昭和25(1950)年に朝鮮戦争が勃発すると、立川に占領軍が駐留したことで、国立では教育環境を守るための浄化運動が起こりました。浄化運動は文教地区指定運動に発展し、昭和27(1952)年には全国で初めての文教地区が生まれます。平野氏はこの運動に携わった土曜会のメンバーであり、当時の活動の様子や、その後の文化活動の様子をカメラに収めました。〔写真3〕



写真3 国立駅前で開催した土曜会主催の「映画の夕」昭和27年(当館所蔵)



写真4 公団国立団地の子どもたち 昭和37年(当館所蔵)

昭和30年代からは、役場(市役所)の広報紙である「町報くにたち」や「市報くにたち」などに使用するために撮影された写真が多く残されています。現在、これらの写真や資料は、市役所での役目を終えて、「市役所広報移管写真」として、くにたち郷土文化館で大切に保管し、デジタル化の作業を進めているところです。広報移管写真の特徴は、上下水道や道路の整備、し尿処理施設や学校といった建物の建築など、インフラに関わる写真が多く撮影されていることです。昭和30年代から40年代という町の姿も大きく変わってきた時代であり、広報移管写真を順に見ていくと国立の町の変化が浮かび上がるようです。

また、写真には、写真を撮る人がなんらかの意図で写した情報(被写体)と、無意識のうちに写し残された情報が記録されています。たとえば本来ゴミ箱を設置したことを広報するために撮影された写真があります〔写真4〕。このカットは実際には広報誌には掲載されなかったものですが、元気な子どもたちの様子に思わずカメラを向けたものだったのではないかと思います。さらに、おそらく撮影者の意図とは無関係に、写真に写りこむ多くの洗濯物と洗濯物に移る子どもの服やおしめの数は、当時の日本の人口のうちの子どもの割合がまだまだ多かった時代を反映しているように思います。他の写真では、昭和41(1966)年に団地への引越しの様子を写した写真があり、そこに写る家具にはこの頃普及率が高まってきた洗濯機や冷蔵庫といった家電と一緒に、洗い張りの板や釜など、旧来の生活の道具が移りこんでいます。これらの写真は、当時としては当たり前前の光景として撮られたものの中に、当時の事を知る手がかりがちりばめられていることを教えてください。

今回展示を開催し、期間中に展示をご覧になった方から、写真についての情報をいただくこともあり、また僅かですが当館で所蔵の少ない時代や地域の写真についての情報もいただくことが出来ました。展示を通して、まだまだ写真の収集や写真にまつわる情報の積み重ねを丹念に行なっていくかなくてはならないことを痛感することになりましたが、過去の歴史を知る上での写真の重要性や、郷土文化館としての保存・収集活動について、少しでも知っていただく機会になったのではないかと思います。

令和元年度の活動

東村山ふるさと歴史館 鈴木 貴之

令和元年は、東村山という地名が誕生して130周年の節目の年になります。当館では、それにちなんだ展示を行いました。「税金今昔」

江戸時代から大正時代までの租税資料から垣間見える村の様子を紹介しました。江戸時代には東村山市域は5か村に分かれており、展示では年貢割付状を始めとした村に残った資料から当時の各村の状態を明らかにしました。明治時代には、新しい税制が模索されますが、その紆余曲折を村がかかわった地租改正事業の資料から見ていきました。



明治初年公図

他にも営業税、所得税などのさまざまな税の誕生と村での対応を行政資料から示しました。

「夏休み自由研究のたね 東村山を知ろう！」

東村山についての自由研究のたねをたくさん用意しました。当館所蔵の刀や、縄文人のかご編み技術、鉄道、昔の虫、東村山130年の歴史、くだもの・やさいの花、文化財、伝統食、紙に残された歴史、昔の単位など、たくさんの“たね”を準備しました。

「狭山茶どころ東村山」

「東村山音頭」でうたわれているように、かつて東村山では

茶業が盛んでした。今では茶畑も茶の木も市内ではほとんど見ることがありませんが、当時は、各地の品評会へ出品したり、自家製の手もみ茶を作ったりと、茶業は養蚕に並ぶ重要産業でした。



狭山茶は手作業に最後までこだわった産地なので、狭山茶づくりの工程を、当時実際に使われていた製茶道具で再現しました。まず茶摘を茶摘竿や茶摘鋏で、次の茶蒸を青葉蒸し器や三平蒸籠（写真参照）で、最後に茶もみをホイロとジョダンで、映像資料を併せて紹介しました。また、保存や運搬のための茶壺、茶箱、茶筒を展示しました。

品評会の番付表や賞状、かつて東村山にあった製茶工場などを当市資料から示しました。

「なつかしい暮らしと道具たち」

私たちの暮らしは道具とともに変わってきました。近頃では使われなくなった道具を、100年前の電気・ガス・水道のないころの暮らしと、60年ほど前の高度経済成長期の暮らしの再現を通して見ていく展示になります。

また本展示は小学生の社会科見学対応となります。

改元を迎えて～企画展「調布の平成—30年の潮流—」開催～

調布市郷土博物館 土井 昭穂

調布市郷土博物館では、令和元年9月21日から12月15日まで、企画展「調布の平成—30年の潮流—」を開催しました。5月1日の改元を踏まえ、調布市の平成年間約30年の出来事を振り返る機会とするため、企画しました。

昭和30年に市制施行した調布市は、都市近傍の街として高度経済成長期以来の人口増加を続けてきました。近年、特に平成10年頃以降は増加幅が大きく、平成31年4月1日現在の調布市の総人口は23万5805人です。

人口増加に伴い生じた課題に対して、様々な施策がなされ、市内の様子が大きく変化しました。まず、処理すべきごみの量が増加し、資源リサイクルによるごみ減量の取り組みがスタートしました。また、機能的で充実した街づくりを目指し、駅前再開発事業も仙川・国領・布田の各駅で進められました。駅前の交通渋滞等の解消のため、京王線の調布・布田・国領間の連続立体交差事業（地下化）が行われ、鉄道により分断されていた市街地の一体化や鉄道敷地跡の有効利用が図られるなど、より魅力的な市街地の形成が進んでいます。

その他、平成13年に開業した東京スタジアム（味の素スタジアム）などスポーツ施設の充実・イベントの開催や、水木しげる・新選組をはじめ全国的にも注目を集める地域おこしは、特徴的な出来事です。

調布市にとって「平成」は、人口増加に伴う諸課題に対し市街地の開発をはじめとする施策がなされ、スポーツ・文化面の充実も進み、より魅力的な街になった時代といえます。

本展では、調布市の30年間をまとめた年表を展示したほか、市街地開発・文化・スポーツ等に関するパンフレット、グッズ等の資料を紹介しました。また地域の資料だけでなく、平成年間の技術革新を象徴する電子機器を展示し、身近な生活の変化を紹介しました。

今回主として展示したのは、調布市域のイベント関連グッズなど、経過年数の短い資料でした。このような資料もまた郷土の歴史を伝える貴重なものであり、庁内関係部署はじめ各所と連携し適切に収集していくことの重要性を改めて実感しました。

そして調布市は、昨年にはラグビーワールドカップが行われ、今年は2020東京オリンピック・パラリンピックの会場のひとつにもなっており、国際的なイベントが続いています。これらの資料も、調布市にかかわるものを中心に積極的に収集し、展示事業に活用していく予定です。



展示室の様子

「町田市立博物館 最終展」と今後について

町田市立博物館 今井 圭介

開館 45 年を迎えた町田市立博物館は、展示事業を終了しました。本稿では、これまでのご愛顧に感謝するとともに、計画中の（仮称）町田市立国際工芸美術館へのテイクオフとして、2019 年 4 月 20 日から 6 月 16 日まで開催した「町田市立博物館最終展－工芸美術の名品－」の内容を中心に報告いたします。

町田市立博物館は 1973 年、当館より 2 年前に整備され開園していた本町田遺跡公園（現東京都史跡・指定 1992 年）近くに町田市郷土資料館として開館しました。3 年後、現名称に変更してからは総合博物館として郷土資料の他、工芸美術、絵画などの分野でも展示活動を行い、作品や資料の収集もしてきました。特に東南アジアの陶磁器やボヘミアングラスなどのガラス工芸品は国内屈指のコレクションとの評価もいただいております。最終展ではこうした工芸美術品を中心にその収集活動を紹介しながら選りすぐった名品をみなさまにご堪能いただくことといたしました。

展示は 2 つある展示室のうち第 1 室で大津絵、錦絵、染織、懐中時計や陶磁器、ガラスなどの作品と収集に至るまでを紹介し、第 2 室ではさらに陶磁器とガラスにスポットを当て、象徴的な色彩として〈赤〉と〈青〉をテーマに、色にまつわる事柄

やエピソード、制作や着彩に関する技法などを約 100 点の作品や資料によって紹介いたしました。

この最終展は市内外から 11,143 人のお客様をお迎えしました。これは 2000 年以降では一番の入館者数であり、歴代としても 7 番目の人数となりました。展示終了後は、市民に工芸美術への親しみを持っていただき、（仮称）町田市立国際工芸美術館へ期待感を高められるよう館外での出張展示や、ガラスや陶磁器の制作体験講座を実施しています。



教員のための博物館の日 2019 in 府中市郷土の森博物館～郷土から宇宙まで～の開催

府中市郷土の森博物館 本間 隆幸

◇教員のための博物館の日とは

国立科学博物館が、2008 年から実施している教員向けの博物館利用のプログラムで、学校の先生に「博物館に親しんでもらうこと」「博物館の学習資源を知ってもらうこと」を目的とした、夏休みイベントである。開始当初は国立科学博物館のみだったが、徐々に参加館を増やし、2018 年は全国 33 館が参加している。開催館は自然史・科学系のみならず、歴史系や総合にわたり、関東では 9 館、東京では主催の科博の他、日本科学未来館で行われていた。

当館では、当初市内教員向けに研修会を企画していたが、市外の学校利用も少なくないことから枠を広げ、この「教員のための博物館の日」に 2019 年、初めて参加した。多摩地域の博物館として初、都内の総合博物館としても初の参加である。実施内容は、特に決まったプログラムがあるわけではなく、各館にまかされている。

◇開催内容

当館では 8 月 1 日に、以下のスケジュールで実施した。

○午前（理科中心）

・常設展示室自然コーナー展示解説と園内紹介・プラネタリウム学習利用と「自由研究おたすけプラネタリウ



プラネタリウム学習投映の説明の様子

ム」の番組見学・利用方法等案内、意見交換

○午後（社会科中心）

・園内復元建築物・常設展示室解説（昔のくらしの学習利用紹介含む）・利用方法等案内、意見交換

◇開催結果

参加者は、定員 30 人に対して 26 名。内訳は、小学校教員 10 人、中学校教員 7 人、高校教員 3 人、博物館関係者 6 人。市内 2 人、市外 24 人。午前 17 人、午後 13 人であった。

当館の学習利用は、小学 3 年の社会科と 4 年のプラネタリウムの利用が中心であるため、参加者も小学校の教員が多数を占め、市内の教員も 1/3 程度と想定していたが、小と中高の教員の参加が同数で、市内の教員は 1 割程度という結果であった。

アンケートによると、参加動機は、自己研鑽 44%。博物館利用法の学習 41%。また、プログラムの内容に満足は 95% であった。

このように、大盛況とは言えず、参加者の内訳も目論見とは違った。しかし、参加者の満足度は高く、それなりの成果があったものと判断している。特に、教員たちと率直に意見を交換し得たことは有意義であった。今後も継続実施していきたいと考えているが、プログラムの精査・刷新など課題も少なくない。



復元建物説明を聞く参加者

江戸の文化を世界に発信

奥多摩水と緑のふれあい館 神山 正明

日原（にっばら）は、東京都の最西端奥多摩町の北部に位置する奥多摩駅からバスで30分ほどのところにある静かな山里の集落です。山一つ越えると山梨県、埼玉県に隣接し急峻な山々に囲まれ、匠の技により築かれた石積みの上に建物を建て暮らしてきました。そんな日原の暮らしを支える主要な産業は林業で、切り出した木材は集落を流れる日原川を使って下流の江戸に向け搬出しました。このほか林業が盛んな日原は箸割村と呼ばれるほど全戸で白箸作りを生業としていました。その歴史は古く江戸時代初期、徳川家の菩提寺である上野寛永寺の宮様に京都から付き添った御箸師が御料地だった日原のミズキで白箸を作ったのが始まりとされています。出来上がった箸はその長さによって使用目的が異なり、七寸（21cm）、八寸（24cm）、九寸（27cm）があり、七寸、八寸は一般庶民向け、九寸は主に皇室向けに作られておりました。箸作りの最盛期は明治、大正、昭和初期頃で、当時ほどの家にも「箸割小屋」と呼ばれる作業場を設けておりました。特に年末となるとどこの家でも生産のピークを迎え、夜遅くまで作業小屋の灯りが消えることはなかったそうです。白箸ができるまでには、材料となるミズキの木の伐採、切り出した木材の乾燥（概ね1年以上）の後、樹皮が付いたままの原木を八等分に割る大割工程、さらに2cm角に鉋で割り仕上げ工程、その後昭和初期まではすべて手作業で

したが、2cm角に割った材料を丸く削る手押し機械が導入されたことで作業時間も大幅に短縮されました。最後に両端を細く削る手作業を経て白箸が完成します。これを一束1400膳とし、奥多摩駅近くの卸問屋へ運び流通しました。そんな日原の白箸作りも奥多摩に昭和19年に電車が開通し、主要産業が林業から次第に安定収入が得られる石灰採掘に変わっていったことで、白箸の生産は減産されるようになりました。時代が平成に代わり賑やかだったかつての産業を振り返り、日原白箸作りを子供のころ見て育った地元の有志により伝統白箸作りが復活し、箸作り体験教室を通じて広く町内外に紹介されることとなり多くの方に体験いただき、さらに時代が令和に代わり奥多摩町全域に多くの海外からのお客様が訪れるようになり、オーストラリアパイロンベイハイスクールより中学生が交流事業で来日され、奥多摩の地元中学生と白箸作り体験を行うなど、江戸時代からこの地域に伝わる伝統産業が海外へも紹介されることとなりました。今後も日原に受け継がれる伝統文化を広く国内外に発信し、山里の振興に繋がればと思います。



教育学習事業とその改善に向けて

福生市教育委員会教育部生涯学習推進課文化財係（福生市郷土資料室） 田中 愛誠

これまで福生市郷土資料室では多様な教育学習事業を実施してきましたが、こうした活動を振り返ると博物館での学びの強みである利用者自身が「モノ」を通して思索し、その中で多様な発見を見出す活動が少ないことに気が付かされます。

例えば、小学校向けに実施している「むかしの道具調べ」では職員が資料を提示し、問いかけながら正しい答えにたどり着けるように導く内容が中心でした。しかし、あえて博物館での学習をおこなうのは「モノ」の観察から子どもたちが主体的に何かを発見することを期待してではないかと私は考えます。

そこで、今年度の小学生向けの「むかしの道具調べ」について子どもたちと「モノ」を中心とした学習活動がおこなえるように試験的なプログラムを実践いたしました。子どもたちが自由に資料に触れ、そこから得た観察に基づいて道具の機能や工

夫を発見するとともに、そうした背景となる各時代の暮らしを想像できるような展開を目指しました。

個々の観察では、「大きなコードレスアイロンより小さな電気アイロンのほうが重たいことに驚いた」という複数のアイロンを観察して気が付いたことを口にする子もいれば、「炭火アイロンにはなぜ煙突があるのだろう」、「炭火アイロンの後部にあるスイッチは何に使ったのだろう」といった個別のアイロンの観察に基づいた疑問を抱く子など、多様な視点が見られました。

全体として通常より多くの子どもが資料に触れ、意欲的に取り組んでいた様子でした。子ども達は自ら観察し、自分達で道具の機能や工夫を見つけ、そこから闊達な議論をおこなっていた印象です。



子どもたちは生き生きと資料観察！

<活動時の子どもたちの様子>

今回のプログラムは、観察から得られた道具の変化の中からむかしの暮らしを想像し、グループでまとめてもらうことまでを内容に含んでいました。しかし、想定外に個々の道具の観察に時間を取られてしまい、話し合いがそこまで至りませんでした。こうした点については反省し、今後も改善しながら実践していきたいと考えています。

<「むかしの道具調べ」のタイムスケジュール案>

時間	内容
10分	作業の説明
40分	子どもたちの道具の観察 (各10分×4種類)
10分	観察から活躍順を予想 ※道具シールを使用
10分	道具の説明
20分	道具の変化からむかしの暮らしをグループで推測

令和元年度特別展「村山の重松囃子」の開催

武蔵村山市立歴史民俗資料館 並木 梢

当資料館では、特別展「村山の重松囃子」を令和元年11月2日から令和2年1月19日まで開催しました。

重松囃子は、江戸から明治にかけて生きた古谷重松という人物が編み出した祭囃子で、演奏のテンポが速く軽快なリズムであることから重松が暮らした所沢市や行商で立ち寄った多摩地方にかけて急速に広まりました。現在でも所沢市や福生市、あきる野市など各地で演奏されています。



特別展「村山の重松囃子」

当市には重松囃子の流れを汲む囃子連が4団体あり、そのなかのひとつ、萩赤囃子連は明治初期に古谷重松から直接伝えられたという歴史をもつ古い団体です。今回の特別展では、祭囃子の概要や当市での歴史、最も史料が残っている萩赤囃子連を中心に重松囃子の曲目や道具類、各地区の囃子連の紹介などの展示を行いました。

また、関連事業として文化財見学会「萩赤重松囃子」を令

和元年11月23日に開催しました。前述の萩赤囃子連により、重松囃子の演奏や曲目の説明を行っていただきました。当初は屋外での開催を予定していましたが、天候不良により屋内での開催となってしまったことが残念でなりません。少しでも祭の雰囲気を出すべく、会場には地口行灯を飾り、薄暗い中での見学会となりました。来場者には市内外の重松流囃子連の方もおり、急遽各囃子連とのコラボレーションが実現しました。一般の来場者も普段あまり接することのない囃子連の方々と交流でき、楽しんでいただけたようです。

市内には後継者の不足により活動の継続が難しい団体もあり、次の世代への継承が大きな課題となっています。今後も展示や講座を通じ、伝統文化への興味をきっかけを作れるよう継続していきたいと思っております。



文化財見学会「萩赤重松囃子」

令和元年度 日野の化石ニュース

日野市郷土資料館 白川 未来

多摩川河川敷には、今からおおよそ150万年前の上総層群の地層が露出しており、ところどころで化石が見られます。日野市郷土資料館では、毎年3月に「化石でたどる大昔の日野」と題して、多摩川河川敷にて観察会を実施してきました。その観察会は、令和元年10月の台風19号の影響を受けることとなりました。立川と日野を結ぶ日野橋に被害を与えたあの台風です。

毎年実施の観察会の会場は、中央線鉄橋上流左岸です。観察ポイントの多くは礫に覆われ、なぎ倒された樹木が道を阻みます。倒れた樹木にはごみや植物が絡まっています。橋の上から見て分かってはいたことですが、実際に歩いてみると、水の流れのすさまじさを実感しました。

この場所では、上流から下流に向かうことで、古い時代からより新しい時代の地層が次々と露出し、環境の変化を説明することができました。浅瀬の時にはゾウが歩き、陸化すると樹木が生え、干潟の時には巣穴が掘られ、海の時代には貝が見られ、時には火山灰や軽石が積もり・・・といった様子が観察できる絶好のフィールドだったのです。そのような状況でしたが、右岸では、新しく貝化石が多くみられる地層が露出するようになり、今後は、こちらが観察会の会場となるでしょう。

もう一つの化石ニュースは「ヒノクジラ」についてです。多摩川中上流域上総層群調査研究プロジェクトの一環として当館所蔵の「ヒノクジラ」の調査が行われました。ヒノクジラは、昭和46年(1971年)に日野市の栄町成就院近くの多摩川河床で発見されて以来、公民館・図書館・郷土資料館と引き継い

で公開されてきましたが、本格的な調査が行われていないままでした。平成29年度多摩川流域の自治体や研究者などによる多摩川中上流域上総層群調査研究プロジェクト実行委員会がたちあがり、群馬県立自然史博物館の木村敏之氏と神奈川県立生命の星・地球博物館の樽創氏といった古生物学の専門家の調査により、ヒノクジラの正体にせまることができました。

ヒノクジラの化石は細長く平たい形状で、発掘時にも破損があり分割されています。また、脆い状態でしたので、パラロイド樹脂を浸透させる保存処理から始めることとなりました。表面の摩擦も進んでいたため、本来の形状をとどめていないこともわかりました。3Dスキャンを行って、化石本体の劣化を防ぎつつ、計測や比較検討作業を実施しました。クジラ類の化石であることは、発見時から明らかではありましたが、どんな種類のクジラなのか、どここの部位なのかきちんとした検討がされないままでした。今回の研究により、骨内部の多孔質の部分や形状からマッコウクジラの仲間であり、上顎骨である可能性が高いことがわかりました。調査されたお二人やプロジェクトに関わった方々にとっても感謝しております。研究成果は、令和2年1月に刊行されたこのプロジェクトの研究報告書に掲載されています。



分割されたヒノクジラ化石

最近の活動報告

五日市郷土館 野々村 めぐみ

◆企画展「江戸時代の郷土の古文書などに残る元号」（平成 31 年 4 月 15 日～7 月 18 日）

令和への改元にちなんだ企画展です。明治・大正・昭和・平成は身近に感じられますが、それ以前、江戸時代の 260 年間にはどのような元号が使用されていたのか、郷土の古文書などに残る元号を探る展示を行いました。

◆企画展「未来に伝えたいあきる野の伝統芸能」（令和元年 8 月 1 日～10 月 31 日）

あきる野市内にはお囃子、神楽、獅子舞、棒使い、歌舞伎など 45 団体が地域の伝統芸の保存継承に取り組んでいます。これらの団体をより多くの人たちに知ってもらうと共に伝統芸能の保存継承の意識を高めることを目的として団体の紹介を行いました。

◆講座「未来に伝えたい伝統芸能 あきる野の獅子舞」（令和元年 8 月 18 日）

獅子舞は、市内に古くは江戸時代に伝えられたと考えられ、現在も小宮、瀬戸岡など 10 地域で保存・継承されています。この市内に伝わる獅子舞について元青梅市文化財保護審議会委員の石川博司氏にわかりやすく解説していただく講座を開催しました。

◆第 17 回ヨルイチ協力事業（令和元年 8 月 31 日）

ヨルイチは、IR 武蔵五日市駅前から小中野交差点までの榎原街道沿いなどで開催されるイベントです。その協力事業と

して旧市倉家住宅において秋川キララホールとの共催で、二胡奏者である桐子さんによる

ミニコンサートを開催しました。二胡の美しい音色に会場全体が魅了されました。ミニコンサートの後に行われた「楽しい昔ばなし・語り」では、市民解説員による郷土に伝わる昔ばなしや創作民話などが披露されました。



二胡奏者 桐子さんによるミニコンサートの様子

◆企画展「無病息災・家内安全などを祈ったお札や掛け軸」（令和元年 11 月 15 日～令和 2 年 3 月 30 日）

五日市乙津地区の旧家の神棚から 36 の神社仏閣から頂いた 119 種類 336 枚のお札が発見され、寄贈を受けました。地元や近郷の神社仏閣をはじめ、日本各地の神社仏閣のお札も集められていました。今回、企画展として「無病息災・家内安全などを祈ったお札や掛け軸」をテーマに、無病息災、家内安全、火難除け、盗難除けなどを祈ったお札を公開しました。また、当時の精神文化の拠り所となった神社仏閣などの繋がりを知ることができる、子どもの健やかな成長を祈った掛け軸（掛幅）などもあわせて展示をしました。

小学 4 年生社会科の学習支援ツール「投渡模型」

羽村市郷土博物館

当館には、小学校 4 年生が玉川上水の学習を目的に、たくさん来館します。4 年生社会科の郷土学習で、郷土の先人の知恵や工夫を知ることがテーマですので、玉川上水が江戸の都市計画において重要な施設であること、羽村を取水地を選んだことの合理性、立地と機能のバランスから生み出された投渡（堰）の仕組みなど、先人の知恵と工夫を、見学を通じて理解してもらいたいと考えています。

ところで、この投渡、実は役割と仕組みを解説するのがとても難しい代物です。言葉だけではほぼ無理でしょう。写真を示しても、動画でも、現物を見てもよくわからないという声をききます。

そこで、平成 27 年の開館 30 周年記念事業に合わせて、新たな模型を製作することにしました。投渡の最大の特徴は、出水時に堰そのものを人為的に壊すことです。これを、実際に水を使って再現しよう、ということになりました。

はじめは、3D 動画などという案も出ましたが、学習効果を狙うなら本物の水出ししかない、と判断して、投渡の各部分を単純化し、水の力で堰が壊れるように工夫しました。

実際に、4 年生の見学で実演すると、これまでは説明中に目がとろんとってしまう子どもたちが、食いつくように見入っています。先生方からも好評で、展示説明はいらぬから模型だ

けやってください、という学校が出たときは、さすがにちょっと複雑でした。

副読本などでは、玉川上水を機能・役割から学ぶようになっていますが、4 年生にはやや抽象的です。しかも歴史の勉強は 5 年生からなのに、いきなり幕府や新田開発がでてくるなど、若干無理矢理な感じが漂っています。模型製作の背景には、堰や水門、水路に込められた様々な工夫を通じて、先人の努力や知恵の具体的な形を学び、そこから玉川上水の役割へと進めれば、学習指導要領が求める「体感的」な学習が実現できるのではないか、という考え方があります。

この「投渡模型」、今のところは狙った効果が出ていると評価しています。ただ、年間に 200 回近く実演しますので、動力のお風呂用汲みだしポンプの不具合や、移動用キャストがもげるなどの問題も発生します。何より、実演者に技術を要求する、という特性があり、



学芸員のトレーニングマシンとしても役立っています。玉川上水羽村堰の仕組みを再現した投渡模型

平成31年度の活動報告

清瀬市郷土博物館 中野 光将

清瀬市郷土博物館は、平成31年に2つの大きな展示会を開催しました。1つ目は、平成29年の夏に好評を得た最新の映像技術を駆使し、子どもから大人まで楽しめる参加体験型企画展として開催した「最先端映像技術展」の続編となる「映像で！VRで！わくわくとことんあそぶ」です。

この展示会では、前回同様、小・中学生を対象に最先端映像技術を通して、コンピューターの興味関心を高めることを目的に、人の身体の動きに合わせてコンピューターが自動的に反応するアトラクションや自分が機関車に乗っているような感覚を体感できるアトラクションを提供しました。

夏休み期間であったこともあり、親子連れが数多く来館し、アンケートにも、また開催してほしいとの回答が多く寄せられ、当館の子どもを対象とした事業の参考になる展示となりました。



2つ目は、柳瀬川流域の発掘成果を展示した「柳瀬川縄文ロマン」を開催しました。清瀬市北部を流れる柳瀬川流域には、縄文時代から人々は集落を作り、生活をしてきました。その流域には数多くの草花や木、それに集う昆虫や鳥などが見られ自然豊かな清瀬を演出しています。しかし、その一方で大雨が降るとしばしば氾濫を起こし、暴れ川としての一面を持ち合わせていました。

今回の展示では、この柳瀬川流域で出土した縄文土器を中心に、発掘調査の成果から見た近世までの柳瀬川の様子を時系列で紹介しました。さらに、この展示では、なるべく実物を近くで見てもらいたいとの考えから、縄文土器をなるべく展示ケースに入れず、露出展示を行いました。

その結果、数多くの来館者の方が、長い時間をかけて展示室にある展示物を食い入るように見ていたのが印象的でした。



小金井市内の希少な庚申塔

小金井市文化財センター 多田 哲

当館では令和元年11月1日から12月25日まで、「小金井の石造物」と題して企画展を開催しました。企画をする側としては、市内に点在する江戸期の石造物を改めて見直す良い機会になりました。中でも全国数知れずある庚申塔に、小金井には近隣稀に見る意匠をもつものがあることに気付かされました。この紙面を借りて、小金井の珍しい庚申塔を3体ほど紹介します。

■宝永五年青面金剛庚申塔 前原町5-16(橋下墓地下)

宝永5年(1708)に小金井村の村人12名が造立した青面金剛庚申塔。陽刻の立体的な青面金剛庚申塔はよく見かけますが、この庚申塔は陰刻です。青面金剛像の輪郭線を刻むだけなら、当然陽刻より造作は簡単なので、ありふれたものかと思いきや、他所では見たことがありません。ありそうでない線刻の青面金剛像です。素朴な味わいが実によいのですが、野ざらしになっているせいか、表面に白いカビのようなもの(粘菌?)が付着しています。注目する市民はほぼ皆無ですが、石造物の研究者から見れば勿体ないことでしょう。

■寛政六年庚申塔 貫井南町4-11

寛政6年(1794)に貫井村講中によって造立された庚申塔。正面に大きく「絶三尸罪」、つまり「三尸の罪を絶つ」と刻字されています。この庚申塔のように「三尸」の刻字がある庚申塔は、「三尸塔」に分類されています。庚申信仰の原点である中国道教の三尸説を簡明直截に表したもので、近隣自治体では類を見ないものです。

この庚申塔は三叉路の分岐点にあり、造立後移設はされていません。左右の側面に「左こくぶんじ道」「右小川・すな川道」の刻字があり、国分寺薬師堂に通じる道と、小平市小川町や立川市砂川町に通じる道の道しるべを兼ねていたことが分かります。昭和48年に市の有形民俗文化財に指定され、現在も貫井の地域住民により大切に保存されています。

■文化三年青面金剛庚申塔

文化3年(1806)、下小金井村の渋谷金右衛門を中心に、講中22人によって造立された庚申塔。元は緑町5-21の渋谷家南側の祠に安置されていたものですが、今回の企画展を機に当館に移管されました。この庚申塔の半肉彫りの青面金剛像は一面六臂で、右手に剣と鉾と矢を持ち、左手に輪宝と弓、それに「ショケラ」と呼ばれる女人像の髪を掴んでぶら下げられています。いわゆるショケラ持ちの青面金剛像は西東京市にもありますが、少なくとも小金井市内ではこの1体だけです。「ショケラ」については、庚申の日の夜に性交を慎むことを示したものの、あるいは三尸そのものを指すなど諸説あります。

以上、簡単に3体の庚申塔を紹介しました。大陸から渡来した庚申信仰は、日本で仏教や神道と習合して独自の進化を遂げ、バリエーションも豊富です。身近に実物が見られる歴史資料にもかかわらず、研究者は限られています。歴史に関心をもつ市民は少なくありませんが、今少し身の回りの石造物に目を向けてもよいのではないのでしょうか。

令和元年度の事業報告—「阿豆佐味天神社本殿」特別公開—

立川市歴史民俗資料館 漆畑 真紀子

立川市内に現存する木造建築物で最古である、立川市指定有形文化財「阿豆佐味天神社本殿」の修復工事が、約2年の歳月をかけて2019（令和元）年の7月に終了しました。それを機に、文化財をより身近に感じいただき関心を深めてもらうことを目的として、東京文化財ウィーク期間に合わせて、2019（令和元）年10月20日（日）および26日（土）に本殿の特別公開見学会を実施しました。

立川市にある阿豆佐味天神社（立川市砂川町4丁目）は、瑞穂町殿ヶ谷の阿豆佐味天神社より新田開発開始とほぼ同時期の1629（寛永6）年に、砂川の村の鎮守として勧請された古社です。現在の本殿は、一間社流造、千鳥破風及軒唐破風付、柿葺で、総高約6メートル、桁行約1.8メートル、梁行は約2.8メートルあります。棟札や、木鼻などの絵様や構造的な特徴から、現在の本殿は、江戸時代中期に修造されたものと考えられていますが、正確な建築年代は明らかになっていません。

地元の名社だけあり、見学会の参加者は8割がた地元・立川市砂川の方で、遠くは23区在住の方がお越しくださいました。今回の修復工事では、木鼻に施された獏や象、龍、獅子の彫刻や彩色の鮮やかさが見所のひとつで、参加者は講師の説明に熱心に耳を傾けていました。また、修復工事の際に使用したベンガラ（赤色顔料）や剥落した緑青（青緑色顔料）、使用されていた和釘を実際に間近に見るこ

とができ、見学者の関心を引いたようで質問が相次ぎました。見学会後のアンケートからは、`今後も文化財見学会を計画してほしい、`見学時間を長くしてほしい、など、前向きなご意見が多くみられました。

本殿を見学できなかった方へ向け、2019（令和元）年12月10日（火）から2020（令和2）年2月16日（日）にかけて開催した写真展「立川の風景と人のいとなみ—未来に伝えたいからもの—」（於当館廊下掲示板）でも一部、本殿修復工事の模様を公開しました。写真展では、修復作業中の職人のほか、修復工事前後の違いがわかるように比較展示しました。ご来場いただいた方々は、修復中でないと見ることができない作業風景の写真を、興味深そうにご覧になっていました。

今後も魅力ある企画事業の展開に努め、市民の貴重な財産である資料を積極的・適切に公開していきたいと思えます。



見学会の様子



写真展での展示

令和元年度檜原村郷土資料館

檜原村郷土資料館 清水 達也

檜原村郷土資料館では4月より檜原村小沢地区に古くから伝わる式三番の翁・黒木尉の能面、平成28・29年度に檜原村で現存する村内の郷土芸能の保存記録映像を撮影した映像の展示を行いました。現在は映像のダイジェスト版がご覧いただけます。

式三番は、能楽では「翁（オキナ）」という特殊な演目に当たるもので、能が完成する以前の翁猿楽を伝承するものである。翁は農耕神事の能化であり、現在の翁の形になったのは世阿弥（室町時代）の少し前あたりだろうと推測されており、正月の初会や舞台披きの際などハレの日のみ上演される演目であり、三番叟（または三番三）は「能にして能に非ず」と言われる神事・祈祷曲「式三番（翁）」で、翁の祝言の舞に続けて狂言方が舞う舞でありその内容は魂振鎮魂（ミタマブリタマシズメ）をして五穀豊穡を祈り感謝をささげるものです。



今回展示した小沢式三番の創始年代は不明で地元の方に聞くところ中世から存在したが一時中絶し、明和安永の頃に甲州方面から師匠を招き復活したといわれている。翁の衣装の裏には

「明和七庚寅八月吉日」という墨書きがあり、明和七年（1770年）の銘から江戸時代中期には既に行われていたことがわかる。また古い面箱の蓋の裏には安永3年（1774年）と記されておりこの年代あたりから復活したと思われる。

小沢式三番は小沢地区の鎮守である伊勢社の秋季例祭に奉納される、現在は9月の第一土曜日に行われ午後7時ごろ演者一同は北秋川で禊（ミソギ）を行い、午後8時頃から舞台にて清杯の式、式を終えたのち式三番が始まる。以前は宮司宅の前の広場で行っていたが道を作るために広場が狭くなった為現在は小沢コミュニティセンターにて小沢はやし連による重松囃子と隣の地区の湯久保獅子舞も同日に行われる。



式三番の演目は「出は（三役の登場）」、「翁の謡い」、「千歳の舞」、「翁と尉の対面」、翁の謡いと舞、「太鼓の出は（太鼓の登場）」、「尉の揉出し」、「尉の舞」、「黒木尉（尉と同一人）と千歳の問答」、「黒木尉の鈴の舞」、「送り」、で午後11時頃に終了する。

2019年度 くになち郷土文化館の企画展

くになち郷土文化館 竹内 竜巳

くになち郷土文化館では、2019年度の企画展として、下記の4展示を行いました。

- (1) ミニ展示「くになちと災害」5月25日(土)～7月7日(日)
- (2) 夏季共催企画展「第8回くになち陶芸展」9月1日(日)～21日(土)
- (3) 秋季企画展「カメラが写した国立・本田家資料と市役所広報移管写真を中心に」10月19日(土)～12月1日(日)
- (4) 冬季企画展「むかしの暮らし展」1月14日(火)～3月6日(金)

(1)は当館が収蔵する資料の中から、「関東大震災」および「太平洋戦争」に関連する資料について紹介した他、市の防災安全課が所蔵する備蓄品等を紹介しました。また、たましん地域文化財団より佐藤多持氏絵画作品「戦時下の絵日誌」を借用・公開し、市内近隣施設との連動を目指しました。



「くになちと災害」展示風景

(2)は当館の陶芸窯を利用している団体6団体が「陶芸展実行委員会」を組織し、日頃の創作活動の成果を発表する場とした共催企画展です。企画展関連事業として、陶芸教室(大人対象・子ども対象の2種類)・電動ろくろ体験を含むサークル活動紹

介・陶器のチャリティ販売を実施しました。

(3)は2016(平成28)年に国立市へ寄贈された本田家資料や当館所蔵写真資料(市役所広報課移管写真等)を中心に、国立市内の風景や人々の生活の様子を紹介しました。企画展関連事業として、ピンホール現象を体験する「古民家でカメラ・オブスキュラを体験」を計3回実施しました。

(4)は国立市内の小学3年生を対象とした社会科見学「小学生民具案内」に関連する企画展です。実施内容に関連し、当館が収蔵する民具の中から、照明・暖房・暮らしの移り変わりを中心とした、昔の暮らしの道具を紹介しました。

夏季共催企画展「第8回くになち陶芸展」展示風景

最後になりますが、当館では来る4月4日(土)より、2020年度春季企画展「赤い三角屋根 誕生—国立大学町開拓の景色—」が開催されます。旧国立駅舎の再築完成記念展示となりますので、この機会に是非とも足をお運び頂ければと思います。



「第8回くになち陶芸展」展示風景

平成31年度の活動報告

江戸東京たてもの園 阿部 由紀洋

江戸東京たてもの園では、年に数回、建築や多摩地域の歴史などをテーマとした展覧会を開催しています。今年度開催した展覧会を紹介いたします。

■武蔵野の歴史と民俗—「武蔵野郷土館」がのこしたモノたち(会期：平成31年2月5日～令和元年6月23日)

当園の前身である「武蔵野郷土館」収集資料を紹介する展覧会。毎年定期的に開催しており、今回は考古資料や生活民俗資料の展示に加え、カエルをモチーフにした民芸品などを収集した小澤一蛙のコレクションの一部を紹介しました。ユーモラスなカエルの置物類をはじめ、自らのコレクションをまとめた木版多色刷りの冊子や絵葉書のほか、同好の士との交流をうかがわせる資料を通じて、その人となりを紹介いたしました。

■特集展示「FUROSHIKI TOKYO」(会期：令和元年7月23日～9月29日)

2018年秋、東京都はパリ市庁舎前広場に大きな風呂敷包みを贈り、風呂敷の展示やインスタレーション、ワークショップを通して風呂敷の魅力を世界に発信しました。この展覧会はパリで展示したアーティストによるオリジナル風呂敷を全点公開し、風呂敷の魅力を発信する「FUROSHIKI PARIS」の報告展で、東京都江戸東京博物館と同時開催しました。会期中、風呂敷の包み方を体験するワークショップを開催し、その後も随時体験していただけるようにすることで、その魅力を伝えました。

■小出邸と堀口捨己—1920年代の創作活動、その造形と色彩—(会期：令和元年10月16日～令和2年2月16日)

小出邸は1925年(大正14)、小出収とその妻・琴の隠居所として、現在の文京区西片に建設された木造2階建の住宅で、建築家堀口捨己(1895—1984)がはじめて手掛けた住宅です。堀口は、1920年(大正9)に結成された、日本初の近代建築運動である「分離派建築会」を主導し、建築における芸術的側面や美意識の重要性を問いかけ、生涯にわたりそれを追求した、近代日本を代表する建築家の一人です。当園では、堀口の実質的なデビュー作である小出邸の歴史的価値に着目し、1997年(平成9)に移築、創建当初の様子に復したうえで、98年(平成10)より公開・保存してきました。そして、2019年(平成31)3月、「日本的モダニズム建築の萌芽がみられる作品として貴重である」とその価値が認められ、東京都の有形文化財(建造物)に指定されました。

本展では、小出邸が建設された1920年代に堀口が求めた造形と色彩に着目し、初期の主な活動や作品を通して小出邸の魅力をみつめなおし、堀口の創作の原点を紹介しました。



会場の様子

平成31年度の活動報告

狛江市立古民家園 阿部 智史

平成31年度のむいから民家園では、昔の生活や年中行事について、理解を深めてもらうための事業を展開してきました。また、園内に田んぼを仮設し、稲作を試行しました。以下では、いくつかの取組みについて簡単に報告します。

まず、夏の初めの蚊帳体験は、古民家の奥座敷に蚊帳を張り、実際に蚊帳の中に入ってもらう素朴なものでした。しかし、夏に蚊帳を張る光景は、今ではあまり見られなくなってきており、古民家園の来園者は子育て世代の親子が多く、若い人の中には蚊帳そのものを知らない方もいると思われます。ここでは、昔の夏の風物詩を感じるということで体験してもらいました。

9月には、古民家の縁側にて十五夜の満月を楽しむ鑑賞会を開催しました。開園時間を延長し、古民家をライトアップして夜の古民家園を楽しみながら、月見団子やススキなどを飾る縁側にて長屋門の上ののぼる満月を鑑賞する企画でした。当日は、親子での参加が多く見られたものの、あいにくの曇天であり、月が見えたのはほんのひと時でした。名月の鑑賞は次年度への持越しとなっています。

正月は、人日の節句（7日）に七草粥を来園者に提供しまし

た。食をとまなう年中行事にも触れてもらいたいと考え実施しましたが、寒い日にもかかわらず多くの参加者が見られました。参加者には、一年の無病息災を願いながらお粥で体を温めてもらいました。

こうした年中行事に関する取組みのほかに、今年度は園内に仮設の田んぼを開墾し、稲作を試行しました。狛江市とふるさと友好都市の関係にある新潟県長岡市川口地域から苗の提供を受けたことをきっかけとして、体験学習等で使用する稲や米を自作できないかということで試行しました。作業は、見よう見まねで覚束なかったものの、結果として収穫までこぎ着けることができました。今後は、かつての狛江での稲作について改めて考察し、その上で体験学習の一環に取り込んでいきたいと考えています。



十五夜の様子



仮設の田んぼ

日本獣医生命科学大学附属ワイルドライフ・ミュージアム 2019年の活動

日本獣医生命科学大学附属ワイルドライフ・ミュージアム 石井 奈穂美

当館は、平成27年に日本獣医生命科学大学内に設置された大学附属博物館です。館内には、主に大学史について展示を行う歴史系展示室と、日本の里山に暮らす野生動物について展示を行う自然系展示室があります。今年度は、開館以来初の試みとして、両展示室の企画展を同時開催しました。また他館との連携事業の実施や本学一号棟の文化財登録決定など、充実した1年となりました。

歴史系展示室企画展「麻布区役所と日獣大～110年間の歩み～」
[展示期間：令和元年11月1日～令和2年4月30日（予定）]

当館の展示室が設置されている本学一号棟（本館）は、明治42年に竣工してから26年間でその役目を終えた旧麻布区役所庁舎を、昭和12年に現在の場所に移築したものです。歴史系展示室では、令和元年に麻布区役所庁舎の竣工から110年を迎えたことを記念して企画展を開催しました。



歴史系展示室の様子

自然系展示室企画展「日獣大の野生動物研究最前線」

[展示期間：令和元年8月17日～令和2年4月30日（予定）]

本学における野生動物研究の歴史は古く、昭和59年には獣医学科としては日本初の野生動物を研究対象とした研究室である「野生動物学教室」が創設されています。野生鳥獣による農作物被害の増加や、絶滅危惧種の増加、人獣共通感染症リス

クの高まりなど、人間と野生動物の関係がより複雑化した現在では、学内の複数の研究室にて、野生動物を対象とした様々な調査・研究が行われています。

企画展では、今までの取り組みを振り返るとともに、現在本学で行われている野生動物を対象とした研究の中から、5つの取り組みを紹介しました。

武蔵野ふるさと歴史館との連携事業

企画展「ヒトと動物の物語 歴史民俗資料に見る武蔵野の動物」
[展示期間：令和元年5月18日～7月18日]

2館共催で企画展を開催しました。会場となった武蔵野ふるさと歴史館では、当館所蔵のニホンイノシシ剥製・ニホンジカ剥製が展示されたほか、当館解説パネルの出張展示、当館館長による講演会、当館学芸員による展示解説が行われました。また地域の子どもたちを対象とした企画展連動キッズイベントを本学にて実施しました。

一号棟（本館）の文化財登録

文化審議会文化財分科会の審議・議決を経て、令和元年11月15日に国指定登録有形文化財（建造物）に登録するよう文部科学大臣に答申されました。今後官報による告示を経て登録有形文化財（建造物）となる見込みです。



自然系展示室の様子

令和元年度企画展示 「ひと×いきもの」

東京都立埋蔵文化財調査センター 高田 優衣

企画展示「ひと×いきもの」は平成31年3月21日から令和2年3月8日まで開催されました。縄文時代から近世にいたる様々な出土品をもとに、「ひと」と「いきもの」の多様なかわりについて、「獲」「採」「育」「友」「愛」「祀」の6つのテーマに沿って、読み解いていく内容です。以下にそのエッセンスをご紹介します。

【獲】縄文時代、いきものは大切な糧として狩猟の対象となっていました。狩猟や漁撈に用いた道具類、貝塚から見つかる動物骨や牙、貝などを巧みに利用した道具や装身具などを通して動物達に生かされていた人々の暮らしを描きました。

【採】縄文時代は植物も大きな恵みとなる存在でした。食べ物としてだけでなく、ウルシの利用に関わる木製品や、土器に残る痕跡など、植物が人々の生活に密接に関わっていた様子を解説しました。

【育】弥生時代になって本格的に農耕が始まると、いきものを積極的に育てるようになりました。耕作に使用した道具や古代の牧（まき）と関わる馬具、江戸時代の麴作りに関わる資料まで、様々ないきものの「育」の形を集めました。

【友】二例の埋葬犬（愛媛県上黒岩岩陰遺跡出土・縄文時代早期末、港区汐留遺跡出土・江戸時代）の展示を行いました。時代は大きく離れていても、イヌが人にとって特別な存在であっ

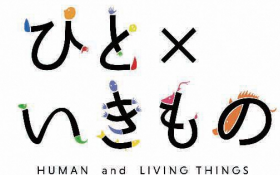
たことがしのばれます。

【愛】江戸時代には、庶民の間でも動物を飼うことが一般的になりました。土人形や、猫の足跡が残された焼塩壺の蓋など、人々が身近なものから空想の産物まで、さまざまないきものを愛でていた様子が見て取れます。

【祀】縄文時代のヘビやイノシシ、トリを表現した土器装飾、古墳時代の鳥形埴輪、古代の鳥形木製品など、人々がいきものにこめた願いや祈りの結晶を展示しました。

また、例年の連動企画として文化財講演会も3回実施しました。「江戸の小売酒（岩淵令治氏 学習院女子大学教授）」、「ここまで分かった！縄文犬（佐藤孝雄氏 慶應義塾大学教授）」、「餌から家畜を考える：先史時代のイヌとブタ（米田穰氏 東京大学総合研究博物館教授）」と、いずれも興味深いお話を伺うことができました。

「ひと×いきもの」の関係は今もなお続いています。単に、歴史の上の話ではなく、未来のより良い関係を考えるきっかけのひとつとしていただけたのではと思っています。



2019年度活動報告

国立ハンセン病資料館 木村 哲也

国立ハンセン病資料館では、毎年春季と秋季の2度、大きな企画展を開催しています。2019年度は、春季企画展「キャンバスに集う～菊池恵楓園・金陽会絵画展」を開催し、病気や障害に負けず、生きる意味を絵筆に託した人たちの絵画表現に光を当てました。その後、本展覧会をきっかけとして、金陽会はNHK日曜美術館でも取り上げられ全国的に大きな注目を浴びました。秋季企画展「望郷の丘～盲人会が遺した多磨全生園の歴史」では、視覚障害者の活動に焦点を当て、多磨全生園の盲人会が残した証言集『望郷の丘』の世界をご覧くださいました。

従来の常設展示や春季・秋季企画展に加え、さまざまな新たな試みにも挑戦してまいりました。昨年度に引き続き映画の上映会や、外部識者を講師として迎えた講演会など企画の充実を図り、映像ホールがほぼ満席となる好評を博したのに加えて、今年度からは新たに、夏休みの宿題を抱えて来館する子どもたち向けの展示解説や、学芸員等が日頃の研究成果を発表するミュージアムトークなどを開始しました。



9月には、ICOM（世界博物館会議）京都大会にてブースを出展、同月には第20回国際ハンセン病学会にて当館の活動に

ついて発表するなど、国際的な発信も行っています。

また、多くの皆さんに情報が届くよう広報に力を入れ、昨年度の公式Facebookアカウント、公式YouTubeチャンネルにつづき、今年度は公式Twitterアカウントを開設して新たな情報発信の試みもスタートさせています。

これらの新たな試みによって、確実に多くの来館者に足を運んでいただくことに成功し、アンケートを見ましても、新たな展示やイベントを通じて「初めて来館した」「久しぶりに来館した」というお客様の声が増えています。

一方で、2019年を振り返ってみると、社会的にもハンセン病問題の大きな節目であったと感じます。

6月には、ハンセン病家族訴訟の判決が下り、7月に国が控訴を断念することによって、判決が確定しました。11月には患者・元患者家族への補償と差別偏見の解消を盛り込んだ「ハンセン病家族補償法」が制定され、併せて「ハンセン病問題基本法」も改正されました。

ハンセン病資料館は1993年に開館し、2007年に国立の施設としてリニューアルオープンして以来、ハンセン病快復者の名誉回復のために、展示やさまざまな手段を通して普及啓発を行ってまいりましたが、今後はその家族へ視野を広げた啓発活動も必要です。これまでの資料館としての活動に加え、新たな社会的課題に応えるべく、より一層の取り組みをしてまいります。

最近の活動報告

八王子市郷土資料館 河津 美穂子

当館では年2回の特別展（図録発行）と数回の企画展を行っています。例年、秋と冬に行っている特別展ですが、本年度は初めてこども向けをコンセプトにした展示を行うこととし、夏休み期間中に特別展「こども考古学教室」を開催しました。解説をマスコットキャラクターの会話形式にしたり、パネルを黒板風にするなど、こどもにも親しみやすい展示を考えました。また、展示室内に本物の土器に触れるコーナーを設け、資料を身近に感じてもらえるようにしました。資料を実際に手にして質感や重さを体感することは、見学者には新鮮だったようです。保存の観点からいうと触れる展示は資料を選びますが、ただ



「こども考古学教室」展示解説

ただケース越しに見てもらおうのではなく、実際に触ってみる・使ってみるといった資料の活用について、今後の博物館活動の中で考慮していかなければいけないことだと思います。

企画展については、中央線開業130年、北条早雲没後500年など、八王子に関連する歴史の節目の年にあたりましたので、それに合わせた展示を行いました。例年どおり、夏の戦争関係展示や講座も行っています。

節目といえば、今年は令和の改元、百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録の年でもあり、関連してミニ展示も企画し、平成改元時の新聞、館蔵の「仁徳天皇陵石棺図」などを展示しました。

展示以外にも、体験学習や講座も行っています。本年度は当館では初めて「まが玉づくり」を行いました。例年、夏休み期間中にこども向けの体験学習として「火おこしと土器づくり」を行っていたのですが、猛暑のため屋外での体験は困難との判断から、室内でできる体験を、と考えたものです。定員を大幅に上回る応募があり、急遽実施回数を増やして対応しました。こどもだけ、親子で、大人だけ、と層は様々でしたが、参加者全体の満足度も高い講座になりました。ちなみに、土器づくりに関してはこども向きでなく「おとなの土器づくり」の体験講座を行うことにし、火おこし体験は春休みの時期に移動しました。また、人気のある鉄道の展示に合わせて、市民から寄贈された、昭和初期の市内を走る路面電車や御陵線の動画を放映する講座も行いました。この映像はテレビ局の協力でフィルムをデジタル化できたものですが、館蔵の古いフィルムのデジタル化は今後の課題です。

印刷物としては、新たに特別展図録、郷土資料館だより、研究紀要、資料シリーズを刊行しています。また、絶版だった「八王子の鉄道」の改訂増補版を刊行しています。

0歳からのプラネタリウム

多摩六都科学館 原 朋子

多摩六都科学館では、令和元年度に「0歳からのプラネタリウム」と題して、初めて乳幼児をメインターゲットにした投影を行いました。

当館の一般向けプラネタリウムは、天文スタッフによる全編生解説で通常45分間のプログラムです。投影中のドーム内はわずかな星の光も見られるように真っ暗になるため、小さな子どもが暗さが怖くて泣いてしまったり、トイレや授乳のために途中退出せざるを得なかったりと、大人が落ち着いて見られない状況になりがちです。ご自身は星が大好きでも、子どもが一緒だからとプラネタリウムを見ること自体あきらめてしまう方も少なくありません。

今までに小学校低学年を対象にした35分間の「キッズプラネタリウム」は行ってきましたが、「0歳からのプラネタリウム」では3歳くらいまでの乳幼児を主役にすえ、赤ちゃんと保護者にいっしょに星空を楽しんでもらおうというねらいでスタートしました。実施日は学校団体の少ない水曜日の午前中に設定。また、実施日には特設の授乳スペースや広めのベビーカー置き場を用意しました。

5月に初めて実施した際の事前広報は、科学館のチラシ・ホームページと市報のみ。それでも朝早くからチケットを求めて並ぶ方もいて、25年前の開館以来、平日に満席になることがな

かったドームの234席が初めて全て埋まりました。

スタッフの生解説で、日の入りから今晚の星空～星のお話～夜明け、と進む流れは一般のプラネタリウムと同じですが、時間は30分と短くしました。言葉や語り口は乳幼児を意識して、やわらかく、わかりやすく。スタッフからの呼びかけでいっしょに数を数えたり、歌ったりと、赤ちゃんのための内容で展開しました。投影前からドームの中は泣き声や興奮した話し声でもにぎやかでしたが、そこはお互いさまで、特に退出の案内はせず、大人も子どもも楽しい時間を過ごせたようです。

その後、4回開催しましたが、どの回も朝早くから「0歳からのプラネタリウム」目当ての来館があり、ほぼ満席になる人気プログラムになりました。少し残念だったのは、プラネタリウムを見た後そのまま帰ってしまうお客様が多かったこと。当



館の常設展示室には体験型の展示物や科学絵本を並べたキッズコーナーがあるので、今後はプラネタリウムの後に他のエリアも楽しんでから帰る流れに繋がりたいです。

平成31年度「歴史館大学」活動報告

武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館 紺野 京

武蔵野ふるさと歴史館は、令和元年5月より歴史館大学を開講いたしました。この講座は、当館の文化財指導員、学芸員、公文書専門員による通年の講座で、郷土・武蔵野の歴史や文化を発信することを目的としています。

全10回の講座を実施し、地域に根差した歴史・文化研究を行っていく人材、歴史館の活動のサポーター（ボランティア）となりうる人材の発見・育成、また、本講座の実施によって職員のスキルアップを図る事業です。本講座が生涯にわたっての研究・学習活動を行う契機となることを願い、新規事業として開講いたしました。なお、「歴史館大学」という講座名は、専門的な知識を学ぶことが出来る場としたいという思いから命名しています。

講義テーマは、次のとおりです。

1 「埋蔵文化財と考古学」

井の頭池遺跡群の出土資料から、主に旧石器時代から縄文時代について学び、実物資料の取り扱い方法や記録保存についての実務を行います。

2 「近世武蔵野地域学」

古文書の読解ができる方を対象として、江戸時代を中心に、武蔵野の歴史の調べ方、武蔵野を取り上げた歴史研究、市域の文化財について学びます。

3 「歴史公文書で見る武蔵野の近現代」

当館に保存されている歴史公文書を使って、武蔵野市域の近現代史を学び、文書の見方・使い方等を紹介し、公文書保存の大切さや利用の仕組みを学びます。

4 「民俗学事始」

民俗学が解き明かしてきたモノゴトについて、民俗学の草創期に活躍した柳田國男や折口信夫、南方熊楠らについて、また、市域の民俗研究について理解を深めます。

各々の担当専門分野の基本事項及び武蔵野市域における各研究についても触れ、日々の研究成果を解説しています。

のべ59名の受講者が在籍しており、複数の講座を受講し武蔵野市域の歴史、文化について横断的に学ぶ受講者もいらっしゃいます。

それぞれの講座では講義、集団討論、実習などを経て、各自の学びを深めていただき、最終回には研究発表を行うなど、1年の成果をまとめて終了となります。

武蔵野ふるさと歴史館が郷土・歴史・文化の学びの拠点となることを目指し、令和2年度も「歴史館大学」を開講する予定です。多くの皆様のご応募をお待ちしております。



開館30周年記念特別展「アポロ展」

コニカミノルタサイエンスドーム（八王子市こども科学館） 森 融

当館は平成元年1月28日に開館し、平成31年1月に30周年を迎えました。これを記念して2月23日（土）から3月31日（日）の期間で特別展「アポロ展一月をめぐした人類の軌跡と未来」を開催しました。

内容は米ソの宇宙開発競争の歴史、月の科学、将来の月・火星探査計画などを模型やパネル、アポロ船内作業服実物などを展示、解説したもので、目玉はアポロ15号・16号が採取した2種類の月の石とソ連のルナ16・20・24号採取した月の砂です。



30周年記念の最初のイベントとして、1月27日にはJAXAの的川泰宣名誉教授に「宇宙時代がひらいた世界～アポロ50周年と私たちの未来」のテーマで講演をいただきました。アポロ計画や日本のロケット開発の歴史から未来の宇宙時代までを爆笑の裏話を交えてお話しいただき、しばらく笑いが止まらなくなる方もいらっしゃいました。

特別展は2月23日からスタートで、21日22日に設営が行われ、月の石も搬入されました。頑丈なガラスケースに入っているものの、セキュリティには気を遣うことになり、緊張の日々が始まります。

特別展初日には月周回衛星「かぐや」のプロジェクトマネー

ジャーを務められたJAXAの佐々木進名誉教授に「ふたたび月へ」のテーマで講演をいただきました。月の成因、「かぐや」探査の成果、これからの月探査、月への旅行などについてお話しいただき、終了後には質問の列もでき、佐々木先生には、その後、特別展をご覧いただいたのですが、その間も「かぐや」の成果の展示について質問する親子の姿も見られました。

月の石を展示したことで1970年の大阪万博のような大行列になるかと思うと、そうではなく、小・中学生が月の石の前を素通りするほどで、いくつかの新聞の取材も受けましたが、若い記者の方も当時の熱狂ぶりがピンと来ないようでした。ただ大阪万博世代の方の反響は大きく、新聞記事などを見て、遠くからも来館していただきました。

アンケートでは「貴重な月の石を間近で鑑賞できたことが喜びであった。(60歳代)」「本物の月の石・砂が見られて感動。(50歳代)」「また若い方からも「月の石を間近で見られて良かった。」(30歳代)」「火星という別の世界への旅を楽しみにしていきたいと思った。(10歳代)」と好評をいただきました。

月着陸から50年を経て、月より数百倍遠い小惑星に探査機が行って帰って来ることが出来る時代になり、若い世代は月着陸など当たり前を考えているのかと、大阪万博世代の筆者としては改めて時代が進歩したことを感じる機会になりました。

“スギメ”が来たる

首都大学東京 91 年館（学芸員養成課程展示室・実習室） 土屋 健俊・加藤 早百合

さる9月9日、一台の大型トラックが本学に到着しました。その積み荷はスギの丸太でできており、全長がおよそ750cm、幅と高さはおよそ60cm、重さはおよそ350kgにも及びました。中は削りぬかれており、人が5人乗れるほどのスペースがあります。そう、実験用の丸木舟“スギメ”がその正体です。

1. 本学に所蔵された“スギメ”とは？

この丸木舟“スギメ”は、国立科学博物館の海部陽介氏が代表を務める「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」において昨年の7月に台湾から与那国島へ渡った、実験用の丸木舟です。なお、“スギメ”の名前はプロジェクトメンバーが付したもので、本学所蔵の資料としての名称ではありませんが、ここでは便宜的にこの名称を使用します。

この舟は、もともと旧石器時代の丸木舟の制作過程を再現することを目的に、本学の山田昌久名誉教授が制作を進めていたものだったところ、このプロジェクトに使用されることになった、という経緯があり、本学に所蔵されることになりました。

なお舟の制作過程については、プロジェクトの時間的制約から旧石器時代の石斧の復元はできておらず、今後の課題を残しているといえます。

2. 保管・保存

この丸木舟はそのまま91年館に運ばれました。その保管・

保存には多くの難関があります。

一つ目はその大きさです。建物の形状の関係で、そもそも館内に入れることができないということがわかりました。そこでやむを得ず、建物脇の屋外で保管することになりました。

二つ目の難関は、風雨や日光への対策です。特に雨が降ると、簡単に水がたまることが予想されました。そこで、大型のビニールシートで簡単な覆い屋根を作り、また舟自体も覆いました。しかし、風が吹くとシートはめくれ、雨水も浸透してしまいました。さらに風雨だけでなく、自然豊かな本学に生息する虫たちや野良猫などによる虫害・獣害も心配されました。

それを解決するため、間口1m四方の大型ガスバリア袋を用意しました。舟をこの袋にどう封入するかが第三の難関でしたが、舟の先端を押しさえつけると、てこのような形でもう一方が浮き上がることを利用し、



やってきた“スギメ”

9名がかりで封入に成功しました。これも耐久性や結露の問題はありますが、現時点ではこのように保管しています。

3. 展示へ

この“スギメ”の展示に向けて検討を進めており、近々皆様にご覧いただけるようにしたいと考えています。

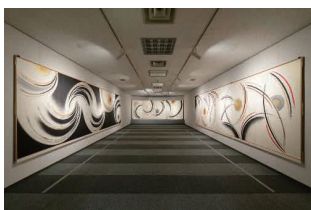
記念展をめざして—平成31年度事業報告—

たましん歴史・美術館 藤森 梨衣

たましん歴史・美術館では、平成31年の企画展として「生誕100年佐藤多持展～水芭蕉曼陀羅／果てしなき運動体～」を開催。日本画家・佐藤多持(1919-2004)の生誕記念の本展は、この年を目指し3年前から調査を進め実現に至りました。

前回展(平成4年)の調査資料の整理からはじめ、図録をもとに生涯に制作した作品のデータ化に着手。そこに未調査の作品を加え代表作《水芭蕉曼陀羅》シリーズの約389点の目録化を進め、生涯の作品変遷を把握する第一歩としました。それをもとに、小学校時代から戦後までの第1章「小中学時代・東京美術学校時代—戦中・戦後」、生涯のモチーフ「水芭蕉」との出会いから初期油彩・日本画を紹介する第2章「水芭蕉曼陀羅が生まれるまで」、代表作《水芭蕉曼陀羅》の誕生から変遷を前・後期でたどる第3章・第4章「水芭蕉曼陀羅の変遷 1966-80年代・1990-2004年」で絶筆までを展覧。展示スペースを最大限に活かし、画業を包括する内容を目指しました。

メインの展示室では、室内に入ると長さ5mを超える六曲屏風に正面・左右を包まれる壮大な空間を演出。作品の世界観を来館者に体感していただけるよ



メインの展示室・後期展

う努めました。

また、本展の工夫として「6館連携企画展」が挙げられます。青梅市立美術館、国立市内のギャラリー3館とたましんギャラリーの6館と共にスケッチや油彩など異なるテーマで同時期に展示を行う連携の取り組みです。連携館の総作品数は350点にのぼり、この取り組みによって、名義協力や、連携チラシによる広報の相互協力など、ひとつの館ではなし得ない活動の広がりが得られました。

関連催事の国分寺市の古刹、福壽山観音寺襖絵の特別公開は、新聞等にもとり上げられ、2日間の公開に600名をこえる人々が詰め掛けました。また、参加型のトークセッション「佐藤多持を語る」では、親交のあった方々から、思い出などが涙ながらに語られ、作家の人間性を深く知る貴重な時間となりました。



観音寺 特別公開の様子

生誕100年、没後10、30、50年など、節目を目標に記念展を開催することは、薄れゆく周囲の人々からの記憶の聞き取りと、世の中への普及の意義も大きくあると考えます。

2010年代が終わり、つづく2020年代。次の節目も視野に入れ、これからも多彩な事業を企画して参ります。

2019 年度活動報告

町田市民文学館ことばらんど 神林 由貴子

町田市民文学館ことばらんどでは、2019 年度は新たな試みを実施した一年となりました。

春季企画展では、10 代・20 代の若い世代を対象に、文字デザインに着目した企画展「大日本タイポ組合展 文ッ字」を実施。沢山の若い世代が来館し活気のある展覧会となりました。

また、2019 年秋季企画展から 2020 年夏季企画展までの 4 つの展覧会においては、オリンピックを意識した企画を行っています。

その第一弾となる秋季企画展では、文学の視点から日本文化を見直すことをテーマに、町田ゆかりの随筆家・白洲正子を取りあげた「白洲正子のライフスタイル—暮らしの遊び」展を開催。正子の審美眼に適った暮らしを彩る品々—骨董、調度品、文具、着物など—とともに彼女の言葉を掲げ、文化や暮らしを見つめ直すきっかけを提示することができました。

第二弾の冬季企画展では「スポーツと文化の祭典」であるオリンピックにちなんだ展覧会「三島由紀夫展—く肉体—という second language」を開催しました。2020 年に没後 50 年という節目を迎える三島は、スポーツによる肉体



改造で新たな文体・文学テーマを獲得し、先の東京オリンピックにおいて新聞社等の特派員として観戦記等を多数執筆しました。本展では「肉体」をキーワードに、肉体の変化がどのように文学や人生に影響を及ぼしたのかを顕彰しました。

今後は第三弾として、2020 年度の春季企画展で、1964 年から 2020 年までの世相・社会を、文学作品を通して振り返る「東京クロニクル 1964-2020」展（4～6 月開催）を開催予定です。オリンピックが社会に与えた影響、そして文学はそれらをどのように描いたのかを検証します。

夏季企画展（7～9 月開催）では、「のりもの絵本あつまれ！オリンピックへしゅっぱつしんこう！」と題し、子どもたちに人気のある「のりもの絵本」の原画展を行います。展示会場では絵本の世界を楽しみながら最終目的地の競技場を目指します。

そのほかイベントとして、文字デザインに関するフリーマーケット「文ッ字フリマ」や 10 代を対象とした創作講座「その場で書ける！10 代のためのカンタン小説教室」、講演会「万葉集あれこれ—「令和」のルーツを探る」などを実施。若い世代へのアプローチ、時宜にかなったテーマでの事業に積極的に取り組みました。今後は、この試みを検証しつつ、「町田市民文学館ことばらんど」らしい企画で、多くの方々に文学・ことば・文字に親しんでいただくきっかけを提示していきます。

学内外へ活動の場をひろげて

国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 具嶋 恵

当館は国際基督教大学（ICU）初代学長であった湯浅八郎（1890-1981）の大学創設・育成に対する貢献を記念し、1982 年 6 月に開館した博物館です。大学の一施設ですが、展示室・資料室はどなたにも無料で公開しています。主な収蔵品は、湯浅博士が蒐集した各地の民芸・工芸、および ICU 構内に散在する遺跡から出土した旧石器時代と縄文時代の考古遺物です。

常設展示に加え年 3 回、収蔵資料を様々な切り口で紹介する企画展をおこなっています。平成 31 年度は、幕末の揺れ動く社会に庶民がどう生きたかを当時の浮世絵から読み解く「諷刺画にみる幕末から明治の庶民」（4 月 9 日～7 月 12 日）、寝具や灯火具など昭和初期まで各地で見られた寝所の調度を展示する「夜具—一夜のしつらい」（9 月 10 日～11 月 8 日）、米人化学工学者夫妻の収集した日本の美術工芸を紹介する「ICU に眠るコレクション探訪」（1 月 7 日～3 月 13 日）を開催しました。

また、企画展にあわせ ICU 教員や各分野で活躍される専門家に講演を依頼している公開講座は、学生と一般の方がともに参加する生涯学習の機会として毎回ご好評をいただいています。

令和 2 年度は、本学教員の研究発表と連携して沖縄宮古島の祭祀を記録した写真家の二人展をおこなうほか、収蔵品から漆器および染の型紙に焦点を当てる特別展を開催する予定です。

一方、ICU では学芸員の資格取得を目的とした学芸員課程を

開設しており、当館でも大学博物館として館内で該当の授業・実習を受け持つほか、その他の各種クラスにも博物館を開放しており、多様な専攻分野の学生が来館します。

加えて近年は、外部の研究会へ積極的に参加しています。日本初の国際博物館会議大会開催となった 9 月の第 25 回 ICOM 京都大会では、UMAC（大学博物館コレクション国際委員会）のオフサイトミーティングにおいて「Life-size model of the One-Mat Room bridging past and future」（「一畳敷」原寸模型が過去と未来をつなぐ）と題して発表の場をいただきました。大学構内に残る国登録有形文化財であり、松浦武四郎ゆかりの歴史的建造物「一畳敷」を、いかに未来に向けて保存していくかについての当館の取り組みと、文化財の授業での活用についてプレゼンテーションし、各国からの参加者と有意義な意見交換をおこないました（発表者は当館学芸員、福江菜緒子）。

今後も学内学外への働きかけを通して、学びの場を活性化させ、開かれた大学博物館として多くの方に楽しんでいただけるよう、幅広い活動をおこなっていきたく考えています。



2019年度の展示事業について

パルテノン多摩歴史ミュージアム 仙仁 径



公園トイレの紹介コーナー

当館では今年度、特別展2回、企画コーナー展示2回、廻廊展示2回、合計6回の展示をおこないました。ここでは企画コーナー展示をおもに取りあげたいと思います。

企画コーナー展示「多摩ニュータウン トイレたんけん隊～Mr.ベンと巡るトイレとうんちの時空旅行～」は7/19(金)～11/11(月)に開催しました。多摩ニュータウンには計画的に325か所の公園・緑地が配置されており、そのうち124か所の公園にトイレが設置されています。また、約40年にわたって日本住宅公団(現・UR都市機構)を中心に、立地自治体や東京都住宅供給公社などがトイレの設置に関わったことから、様々な形の公園トイレが見られます。特に日本住宅公団の設置した公園トイレには有名な建築設計事務所に設計を委託したため、デザイン的にも優れています。今回の展示では、そのような特徴ある多摩ニュータウンの全公園トイレを、当館で活動している市民ボランティアグループ「定点撮影プロジェクト」メンバーが撮影し、紹介しました。展示会場では、来館者が展示に参加できるコーナーとして、トイレ総選挙や、自宅のトイレに関するアンケートを実施し、多数の方が参加してくださいました。今回の展示では、公園トイレだけでなく、多摩市でのトイレの歴史や、かつてし尿が貴重な肥料として農業で活用されていたことなども紹介しました。展示期間がちょうど夏休みと重なっていたことと、トイレという身近なものがテーマであったことから、入館者に占める小学生以下の子どもの割合が全会期で約26%と高かったのが特徴的でした。公園トイレをテーマにした博物館展示は非常に珍しいため、アンケートでもその点について好意的なご意見を多くいただきました。

10/27(日)には、博物館と来館者が双方向でコミュニケーションをとる方法の一つとして演劇でそれを実践している団体「ミュージアム・シアター・ワークショップ」に出演していただき「トイレ・ストーリー～Mr.ベンと考える、トイレの過去・現在・未来～」を開催しました。展示内容を「電子紙芝居」で分かりやすく紹介し、また観客からトイレにまつわるエピソードなどを引き出して共有するなど、展示ではできない体験に観客の満足度も高かったようです。



永山第四公園のケヤキとインタビュー映像

もう一つの企画コーナー展示「みんなで語る「多摩の宝物」～未来へつなげる地域遺産～」は11/14(木)～3/31(火)に開催しました。歴史ミュージアムのあるパルテノン多摩(多摩市立複合文化施設)は1987年に設置されて32年経ったことか

ら2020年4月から2年ほど大規模改修に入ります。そこで今回の展示ではリニューアルオープンを見越し、未来にのこしたいと地域の方が考える「地域の宝物」を伺い、それらを来場者が考えるたたき台として紹介しました。これまでも市民ニーズをある程度意識して展示テーマを設定していましたが、今回のように市民からの回答をもとに展示を構築するのは初めての試みでした。リニューアル後の博物館のあり方として、市民とともにつくる博物館という方向性を検討しており、今回の展示はその試行といえるものでした。一方で担当者の想定を超える「宝物」が提示されたほか、一つの展示として多種多様な地域の宝物をどう紹介するかなど、通常の展示とは異なる難しさがありました。

地域の方々から挙がった地域の宝物は、風景、生物から団地、街の雰囲気、市民活動など多岐にわたっており、その多様性に驚かされました。一方で複数の方が地域の宝物として挙げたものもありました。例えば多摩ニュータウン開発関係の道路拡張で伐採される予定だったものの、地域の方の働きかけにより移植されたケヤキが植わっている永山第四公園は、ケヤキの保護に奔走されたご本人と、公園の近くにお住いの多摩ニュータウン住民の方からの証言を得ることができました。展示では紹介されていませんが、当館の協力者には永山第四公園の造成などに関わった方もおり、永山第四公園とケヤキは、開発前から住んでいる方、多摩ニュータウンに引っ越してこられた方、さらに公園をつくった方というそれぞれ異なる立ち位置からお話を伺うことができる希有な存在であること明らかになりました。

今回の展示では、回答いただいた方の一部におこなったインタビューを動画に撮影し、編集した動画を会場で映写しました。3分程度の短い動画でもパネルと比べればより多くの情報を伝えることができ、さらに話をされている方の人となりや思いが表情や話し方から伝わってくるなど、動画には多くのメリットがあります。今回撮影した動画も「地域の宝物」として大切に後世に伝えていけたらと思います。

展示では、文化財に留まらず多様な地域の宝物が提示されていますが、多様な語りを見ていくと、さまざまな場所で人々による地域コミュニティ形成の努力がおこなわれており、その努力の自負の上に地域への愛着が形成されていることが伝わります。今回の展示は結果として、人々の語りを通じて地域アイデンティティーの一端に触れることができるものになったのではないかと展示担当者は考えています。

前述の通り、当館は2020年4月より大規模改修が始まります。その際に歴史ミュージアムも展示をリニューアルする予定ですが、2019年度の展示事業では、参加型展示や市民とともにつくる展示、動画での記録など、今後の新しい歴史ミュージアムへとつながるような試みをおこなうことができました。リニューアルオープンは2022年の春以降を予定していますが、新しい試みをさらに盛り込んでいきたいと考えていますのでご期待ください。

ICOM 京都大会開催と UMAC への参加

東京農工大学科学博物館 齊藤 有里加



ICOM 会場



UMAC 総会の様子

2019年9月は京都でICOM国際博物館会議が開催されました。日本での開催は初とのことで、東京農工大学科学博物館もUMAC（大学博物館・コレクション国際委員会）に参加し、ポスターセッションにて、昨年実施した勸工寮葵町製糸場3D化プロジェクトのクラウドファンディングの取り組みについて、事例発表を行いました。国際会議で、大変緊張しましたが、今回のボードメンバーには同じく三多摩公立博物館協議会に加盟の国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館の福野明子先生がいらっしやり、ほっと胸をなでおろしました。

総会では「small museum」と大学博物館のことを表現していたのが印象的で、大学博物館の位置づけの難しさは海外でも共通の課題のように感じました。一方、学術標本や教材、学生の教育活動など、数多くの大学博物館の事例を拝見し、社会と大学をつなぐ「窓」としての機能の重要性を改めて感じます。

東京農工大学科学博物館は繊維博物館時代より地域貢献・人材育成に特化した活動を展開してきました。博物館学生組織よりも数が多い、200人余りの活動者を持つ友の会組織は、設立から40年近くも続いており、大学博物館の中でも特徴ある活動であると考えています。国際的な博物館の動きに触れ、大学博物館として社会に還元できることとして博物館の人材は資産だと実感するとともに、改めて自館の取り組みを見直すきっかけとなりました。

三多摩の名簿にも大学博物館がみられるようになってきました。今後も博物館活動における様々な情報交換をさせていただけたら幸いです。

平成31（令和元）年度活動報告

集合住宅歴史館 溝口 忠

■「災害に強いまちづくりを体感しよう！」を開催

令和元年12月26日UR都市機構主催（読売KODOMO新聞協力）により「災害に強いまちづくりを体感しよう」をキャッチフレーズに小学生とその保護者（1日3回各2班）を対象に見学ツアーを開催しました。集合住宅歴史館へ到着・受付後、いざ見学ツアーへ！まずは振動棟にて東日本大震災と北海道胆振東部地震の再現地震を体験し、日頃の防災意識を高めていただきました。途中、非常食の試食において小腹を満たした後、防災をテーマにしたワークショップとして、防災公園のジオラマ制作を体験し、子供たち



見学ツアーでの説明



防災公園ジオラマ制作ワークショップ

は真剣になって制作に励んでいました。古い集合住宅を移築した集合住宅歴史展示棟では随所で防災に関連した子供向けのクイズを出題しました。途中で昔の黒電話を使って実際にダイヤルを回して体験してもらいましたが、そもそもダイヤルの回し方がわからない子供が少なくなかったことが時代の流れを感じる一面でした。制作したジオラマは家族と一緒に記念撮影し、楽しかった冬休みの思い出としてお持ち帰りいただきました。

■集合住宅歴史館の来場者について

本年度も昨年並みの来場者が見学されました。令和元年（平成31年）の来場者を業種別で分類すると、学校関係が一番多く34.1%（前年28.8%）、次いで官公庁等19.8%（前年20.1%）、不動産・建設関係19.5%（前年24.7%）、その他26.6%（前年26.3%）でした。来場者のアンケート結果は“高い”と“やや高い”を合すると97%（前年97%）の方から高い満足度が得られ、案内人によるきめ細かな対応が高評価の要因とされます。

平成31年度の活動報告

東大和市立郷土博物館 阿美 優貴

はじめに

平成31年度に開催した展示活動の中から、企画展示「日本と世界のクワガタムシ・ハナムグリ」と「吉岡堅二展—日本画deあいうえお—」についてご紹介します。

企画展示「日本と世界のクワガタムシ・ハナムグリ」（7月20

日～9月1日）

子どもたちにも人気の高いクワガタムシとハナムグリの標本を、あわせて382種（1841個体）展示しました。狭山丘陵にも生息するヒラタクワガタは、ボルネオ島（東南アジアの島）にも同じ種がいます。一方で、ホソアカクワガタなどは、同じ

種すら日本にいません。どうして同じ種が広く生息しているのか、同じ種のクワガタが日本にはいないのか、考える機会としてもらいたいと思い企画しました。

ハナムグリの仲間は世界に広く分布しますが、中でもアフリカ大陸で大繁栄を遂げています。東南アジアの熱帯地域にも多数のバリエーションに富んだ種が生息します。本展示では、日本に生息する47種のハナムグリのうち、46種を紹介しました。

また、クワガタムシに関しては、「クワガタギネス」のコーナーを設けました。



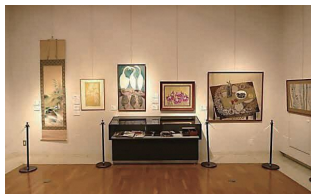
これは、昆虫専門誌に掲載された日本産野外採集のギネス個体などを展示したものです。クワガタムシのような大型個体になると、特に大きく種の特徴がはっきりします。その迫力ある姿に、感嘆の声が寄せられました。

展示解説の様子
企画展示「吉岡堅二展—日本画 de あいうえお—」(9月21日～10月27日)

東大和ゆかりの日本画家・吉岡堅二の作品や、制作に使った画材などを、あいうえお順で紹介しました。これまでは、堅二の作品を中心に展示してきました。今回の展示ではさらに、旧宅に残されていた画材道具や技法に焦点をあてることにより、日本画に親しみやすい展示となりました。

会期中には、オリジナルの岩絵の具を作るワークショップや箔についての講演会、日本画制作実演など、絵の制作に関するイベントも開催しました。その中で、滝沢具幸氏(日本画家・武蔵野美術大学名誉教授)による箔押しの実演を交えた講演会は、大変好評でした。堅二の作品にも、「唐獅子」や「群鶴」など、箔を使ったものがありますが、作品に箔をはりつける作業は、繊細な技術と集中力が必要であるということがわかりました。

次年度は、吉岡堅二の没後30年という節目の年にあたります。



展示風景

これまで調査されてきた資料などを活かし、魅力ある展示を行っていききたいと思います。

そのほかに開催した主な企画展示・ロビー展示は、以下のとおりです。

企画展示「七宝焼きで描く星たち」(3月23日～5月19日)

星をモチーフに創作活動をしている飯沢能布子氏の七宝作品17点と、それに関係する星の写真をとおして、アイヌの生活や文化から生まれた星座や星について紹介しました。

ロビー展示「狭山丘陵で学んだよ」(3月23日～5月6日)

職員が出張授業を行い、狭山丘陵や公園で観察や体験をとおして自然について学んだ小学生たち。授業のまとめとして作った俳句や詩を展示しました。

ロビー展示「多摩の戦跡パネル展」(8月1日～9月1日)

多摩地域の軍需工場や軍事施設などの戦争の痕跡を写真パネルで紹介しました。

ロビー展示「緋」(9月7日～9月29日)

緋を復元するまでの工程写真や機織作業の公開をとおして、緋とはどのようなものか、村山緋の特徴について紹介しました。

ロビー展示「大和村100年」(10月19日～11月24日)

大正8(1919)年に大和村が誕生してから今年で100年。昭和29(1954)年に大和町となるまでの間には、多摩湖の完成・戦争など様々な出来事がありました。当館に所蔵の地図や写真資料を中心に展示し、当時の大和村の様子を紹介しました。おわりに

当館のプラネタリウムは、季節ごとの投影のほかに、乳幼児を対象としたひよこプラネタリウムやクリスマス投影などの特別投影を行っています。

そのほかには、旧日立航空機(株)変電所(市指定文化財)、旧吉岡家住宅(国登録有形文化財)の公開や自然・天文・文化財の講座など、年間をとおして幅広い活動を行っています。

今後も、郷土の自然・暮らし・歴史に関連した事業を行い、市内外を問わず、多くの方に楽しんでいただけるように活動していききたいと思います。

平成31(令和元)年度活動報告

瑞穂町郷土資料館けやき館 北爪 寛之

平成31(令和元)年度は、瑞穂町郷土資料館けやき館としてリニューアルオープンして5周年を迎える記念の年となりました。主に次のような特別展・企画展やイベントを開催しました。

○主な特別展・企画展

企画展「みずほの野鳥」(平成31年4月16日～令和元年6月16日)

瑞穂町は狭山丘陵や水辺、市街地などに多種多様な野鳥が生息・飛来します。鳥の写真100種と剥製などを展示しました。更に、瑞穂



ギャラリートークの様子

の鳥類相や近年観察された外来鳥、観察の目安となる野鳥マップなどを作成して、瑞穂町周辺の野鳥について説明しました。

また、期間中は瑞穂の自然を研究調査している瑞穂自然科学同好会の方によるギャラリートークと、野鳥の講演会「かしこいカラスの本当のひみつ」を開催しました。カラスといえば頭が良いといわれますが、カラスの生態のあれこれをわかりやすく解説しました。

特別展「特撮造形師村瀬継蔵 ～瑞穂で生まれた怪獣たち～」(令和元年7月23日～9月16日)

瑞穂町で特撮造形を造り続けてきた村瀬継蔵氏と、造られた造形物の軌跡を紹介しました。村瀬氏は、世界的に知られた特撮のきぐるみ造形師で、特撮映画の怪獣やヒーローを数多く手

がけてきました。瑞穂町に工房を構えて40年余り活動が続け、今なお現役です。

特別展では、村瀬氏の過去の作品や新規の作品、造形に関する映像、デザインを立体にする工夫、特撮映画の撮影テクニックなどを展示しました。また、関連イベントとしてワークショップや講演会を行い、村瀬氏の造形の歩みをたどりました。

企画展「瑞穂の山車建築」(令和元年10月22日～12月8日)

瑞穂町の箱根ヶ崎・石畑・殿ヶ谷・長岡・高根地区にある5つの山車の建築をテーマに構造や彫刻、歴史をパネル展示で紹介すると共に、宮大工の活動や人形山車復活の取り組み、文化財としての修復の記録などを展示しました。

関連イベントとして、山車建築の研究をしている相原悦夫氏による「多摩地域の人形山車の歴史と現状」の講演、学芸員によるギャラリートークを開催しました。

特別展「ぼくらの大滝詠一さん展」(令和元年12月21日～令和2年2月9日)

大滝詠一氏は、瑞穂町を拠点に音楽活動を行ってきたアーティストです。氏の紹介を通じて、ナイアガラサウンド発祥地としての地域的魅力とその文化的価値を知って頂くため、定期的にも大滝氏の展示を行っています。

今回は第3回目として、大滝氏の作曲、レコーディングにまつわるエピソードを紹介し、地域の方々の協力を得てレコードなど様々な資料を多数展示しました。会期中は、遠方からも数多くの方々に来館頂き、隣接する耕心館での関連イベントも大変盛況に開催することができました。

企画展「ひなまつり展2020」(令和2年2月20日～令和2年3月8日)

当館に隣接する耕心館と合同で開催する、この季節、恒例となった催しです。町民よりご提供いただいた雛人形や晴れ着、

地域のボランティアの方々が制作したつるし飾りなどの展示のほか、作り方のデモンストレーションや民話の語り、もちつき体験なども実施しました。毎回大変好評を頂いており、今回も専用シャトルバスを運行するなど非常に多くの方々にご来場頂き、大変賑やかな催しとすることができました。

○その他の主なイベント

温故知新の会 郷土の歴史や自然に関する講演会や、子ども向けの体験教室などを開催し、今年度はおかしな気象についての講演、しめ縄作りなども実施しました。

囲炉裏端で語る昔話 常設展示室内に再現した民家の囲炉裏端を会場に、地域の方を講師に迎え、地元の言い伝えや昔のできごとなどを語って頂くイベントを定期的に開催しました。

親子折り紙教室 親子で楽しめる折り紙教室を定期的に開催しました。

イブニングトーク 夕方の時間帯に、落語会や朗読会を定期的に開催しました。

わくわく工作教室 各種の子ども向け工作教室を定期的に開催しました。

みずほ染め織り作品展 8月、町の伝統的な絹織物「村山大島紬(つむぎ)」を題材にした機織り・染色の体験教室(みずほはたおり探検隊)を開催し、体験教室の作品を11月から12月にかけて「みずほ染め織り作品展」として展示しました。

古民家で楽しむ紙芝居 親子向けイベントとして、瑞穂町の伝承を元にした紙芝居(制作は町内の中学生)を制作し、上演しました。

第20回 狭山丘陵市民大学 東村山ふるさと歴史館、東大和市立郷土博物館、武蔵村山市立歴史民俗資料館との合同事業として開催、今回は「狭山茶を学ぶ」をテーマとして実施しました。

累計入館者数 10万人 突破!!

帝京大学総合博物館 堀越 峰之

【今年度最大のニュース】

開館からの累計入館者が10万人を突破!

2015年9月に開館した本館の累計入館者数が10万人を超えました。その内訳は帝京大学の在学生や、一般の方々です。

これは、地道な活動の結果ではないかと感じております。今後も最新の研究を踏まえた展覧会やイベントなどを実施し、皆さまに楽しんで頂けるように活動を展開していきます。



10万人目の入館者は6月に来館された小金井市在住のご家族でした。館長・副館長より記念品の贈呈がおこなわれました。

【主な展覧会・イベントの報告】

今年度は、帝京大学の研究活動や所蔵する貴重資料を社会に

発信するため大規模な企画展の他、小規模な企画展の回数を増やしました。あわせて体験活動を中心とした講座を開催し、活動の幅を広げました。今回はその一部をご紹介します。

■企画展

キャンパス遺跡発見伝 古代多摩に生きたエミシの謎を追え

古代東北地方に住んでいた「エミシ(蝦夷)」と呼ばれた人々と多摩地域との関係に光を当てた展覧会です。帝京大学八王子キャンパス内の遺跡から、東北地方で多く確認されているタイプの竪穴建物跡が発見されました。平安時代初期と考えられるその建物跡から、岩手県北上盆地から限定的に出土する「赤彩球胴甕」と呼ばれる特殊な土器が出土しました。その他にも古代東北地方特有の技術で作られた土器が多く発見されました。分析の結果、古代東北に住んでいたエミシが多摩に移住して生活していた可能性があることがわかりました。これは国内でも極めて異例の事です。この成果は、考古学や古代史関係の研究者の間では知られていましたが、一般の方々にはあまり知られていませんでした。今回の展覧会はこの稀有な遺跡の存在を学

内外の方々に知って頂くために開催しました。近隣の方々のみならず、日本全国から多くの来館者がありました。

■科学体験講座 ミュージアムサイエンスラボ
大学で科学のふしぎを体験しよう

帝京大学には、医療系、人文系、理工系に関する研究所やセンターが数多く設置され、特色ある研究活動が続けられています。本講座は実際に研究の対象となるものに触れ、どのように研究や活用するのかについて体験していただくことを目的として開催しました。今年度は以下の4つをおこないました。

・カイコを育てて糸をとろう

実際にカイコを育て、繭になったカイコから絹糸をとりました。

・縄文時代の納豆づくりの謎を探ろう

ススキを使って大豆から納豆を作りました。あわせて大豆を発酵させている枯草菌を顕微鏡で観察しました。

・DNAを肉眼で観察しよう

トラフグの精巣から肉眼で観察できる形でDNAを取り出しました。

・鉱物で万華鏡をつくろう

鉱物と表面反射鏡を使って本格的な万華鏡をつくりました。どの講座も予想を上回る反響で、募集開始からあっという間に定員に達してしまいました。今後も継続する予定です。



2019年度に実施した主な展覧会やイベントのチラシです。幅広い分野の研究がおこなわれている大学の利点を活かして、今後も活動を展開していきます。

令和元年度展示報告

青梅市郷土博物館 小山 政史

◎企画展「甲冑武具展～青梅ゆかりの品々を中心に～」会期：平成31年4月20日(土)～令和元年6月16日(日)

青梅市では、武蔵御嶽神社が所蔵する国宝「赤糸威鎧」の復元模造品を製作し、常設展示や他館への貸出しを通じて普及活用に取り組んでいます。また、市内の旧家や寺社には鎧や鞍、槍などの甲冑武具が今も残されています。

本展覧会は、一般社団法人日本甲冑武具研究保存会の協力をいただき、青梅にゆかりのある甲冑武具を中心に展示するとともに、赤糸威鎧をはじめとする市内の甲冑武具の研究史についても紹介するというものでした。

展覧会では、赤糸威鎧の復元模造品のほか、青梅市の有形文化財に指定されている金小札段威二枚胴具足(武蔵御嶽神社所蔵)や、伝・師岡山城守所用の槍(天寧寺所蔵)など、青梅にゆかりのある甲冑武具を中心に、展示を行いました。さらに、日本甲冑武具研究保存会会員の所蔵品として、室町時代末期の本小札色々威胴丸や、小田原城天守閣所蔵の鉄錆地四十八間総覆輪座星兜鉢なども出品していただき、展示に厚みをもたせました。



また、赤糸威鎧の研究史として、徳川吉宗上覧に関する書状や、松平定信の家臣から出された書状などを展示し、この鎧が江戸時代から時の権力者たちを

魅了していたことも紹介しました。

◎企画展「青梅のいきもの～みんなつながっている～」会期：6月29日(土)～9月23日(月・祝)

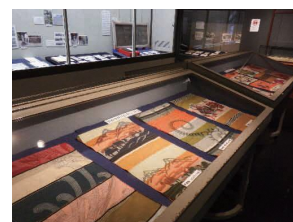
本展覧会は、哺乳類や鳥類の剥製や植物の写真などを展示し、市内に生息・生育する生き物について解説するとともに、平成30年に、青梅市で策定した「青梅ひとと生き物イキイキプラン」についても紹介するというものでした。

夏休み期間ということもあり、多くの子どもたちが来館し、剥製や昆虫の標本を見ることで、自然豊かなふるさと青梅について考える展覧会となりました。

◎企画展「青梅の織物～糸が紡ぐ今と昔～」会期：10月5日(土)～令和2年1月13日(月・祝)

「青梅縞」や「青梅夜具地」など、かつて織物のまちとして栄えた青梅。本展覧会は、その歴史について、文献や民俗資料などの展示によって紹介していくというものでした。

江戸時代に隆盛を誇った青梅縞の衰退、青梅縞から青梅夜具地への転換、「ガチャマン景気」と呼ばれる好況に沸いた戦後、



そして現在というように、青梅の織物の歴史が追体験できるような構成でした。また、織物に使用する道具や、美しい模様に入った青梅夜具地の生地なども展示しました。

東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩8分
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線「分倍河原駅」から健康センター行きバス「郷土の森」下車すぐ
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線・JR横浜線「町田駅」から藤の台団地行きバス「市立博物館前」下車徒歩7分
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車徒歩15分
調布市郷土博物館	調布市小島町3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩5分
瑞穂町郷土資料館 けやき館	西多摩郡瑞穂町大字駒形富士山316-5	042-568-0634	JR八高梅線「箱根ヶ崎駅」東口下車徒歩20分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「北上台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩1分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920-1	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」西口下車徒歩20分／コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車徒歩10分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から新道福島行きまたは富士見町操車場行きバス「団地西」下車徒歩5分／JR青梅線「西立川駅」下車徒歩15分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から藤倉行きバス「郷土資料館」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行きバス「高幡台団地」下車徒歩5分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」北口もしくは「東小金井駅」からココバス北東部循環③「小金井公園入口」下車徒歩5分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」から西武バス「イオンモール」行きで「八幡神社」、または都営バス「青梅車庫」行で「八幡神社前」下車徒歩2分
バルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車徒歩9分
江戸東京たてももの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口から西武バス「小金井公園西口」か関東バス「江戸東京たてももの園前」下車
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口前
東京都立埋蔵文化財調査センター	多摩市落合1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5～7分
集合住宅歴史館 (独立行政法人 都市再生機構)	八王子市石川町2683-3	042-644-3751	JR八高線「北八王子駅」下車徒歩10分、JR線「八王子駅」・京王線「京王王子駅」から宇津木台行きバス「ケンウッド前」下車徒歩5分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」、田無駅北口からはなバス第4北ルート「多摩六都科学館」下車
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から久米川駅行き・所沢駅行きバス「ハンセン病資料館」下車
コニカミノルタサイエンスドーム (八王子市子ども科学館)	八王子市大横町9-13	042-624-3311	JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」から西東京バス「戸吹」・「みついで」行き等「サイエンスドーム」下車徒歩2分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	042-622-8939	JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」からバス「市民会館」下車
首都大学東京91年館	八王子市南大沢1-1	042-677-1111	京王相模原線「南大沢駅」下車徒歩約5分
狛江市立古民家園 (むいから民家園)	狛江市元泉2-15-5	03-3489-8981	小田急線「狛江駅」より徒歩10分/小田急線「狛江駅」北口より「多摩川住宅」行バスで「児童公園」下車
武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館	武蔵野市境5-15-5	0422-53-1811	JR中央線・西武多摩川線 武蔵境駅から徒歩12分/ムーバス 境西循環0番「武蔵境駅北口」から4番「武蔵野ふるさと歴史館」下車
帝京大学総合博物館	八王子市大塚359	042-678-3675	多摩モノレール「大塚・帝京大学駅」下車徒歩15分/京王線「聖蹟桜ヶ丘駅」、「高幡不動駅」、「多摩センター駅」より京王バス「帝京大学構内」行きに乗りし終点にて下車
国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館	三鷹市大沢3-10-2	0422-33-3340	中央線三鷹駅南口または武蔵境駅南口より小田急バス国際基督教大学行にて終点下車/武蔵境駅からタクシー10分
町田市民文学館ことばらんど	町田市原町田4-16-17	042-739-3420	小田急線町田駅東口から徒歩12分、JR町田駅ターミナル口から徒歩8分
日本獣医生命科学大学付属 ワイルドライフ・ミュージアム	武蔵野市境南町1-7-1	0422-31-4151	JR中央線・西武多摩川線「武蔵境駅」南口より徒歩2分

東京都三多摩公立博物館協議会会報
ミュージアム多摩 No. 41

発行日 2020年3月31日

発行 東京都三多摩公立博物館協議会
2019年度会長 町田市立博物館
町田市本町田 3562 042-726-1531

編集委員 立川市歴史民俗資料館 : 漆畑 真紀子
日野市郷土資料館 : 白川 未来
檜原村郷土資料館 : 清水 達也
小金井市文化財センター : 高木 翼郎